九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古本屋巡りをする人のために（二）

坂口，至
熊本大学文学部助教授

https://doi.org/10.15017/10365

出版情報：文獻探究. 34, pp.20-59, 1996-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

古本屋巡りをする人のために（二）

坂口至

〔目次〕

一、はじめに
二、古書の入手方法
（一）古書目録を利用する
（二）古書即売会に出掛ける
三、古本屋巡りに出掛ける前に
（一）蔵書目録を整備する
（二）一日のスケジュールを立てる
四、効率的に古本屋を回るために
（一）古本屋巡りの曜日と時間について
（二）古本屋は一人で回る
（三）古本屋巡りの七つ道具
（四）古本屋地図を盲信するな
（五）古本屋と懇意にならない
五、良書に巡り会うために
（一）クチコミを最大限に利用せよ
（二）新規開店、店舗改装・移転時を逃すな
（三）回転の早い店に頻繁に寄る
（四）著者ゆかりの土地の古本屋に寄る
（五）古本屋巡りの季節について
六、安価で古書を手に入れるために
（一）古本屋の心証を良くする
（二）ユーズドブック屋を馬鹿にするな
（三）小型本・新書型本の中に掘り出し物あり
（四）「不完全本」を狙う
七、古書の買い時
（一）古書価のメカニズム
（二）安いと実感する値段
（三）古書購入のタイミング
八、いわゆる二度本について
九、古書の整理
十、古書の余得
十一、古本屋巡り喜怒哀楽
（一）服装で値段を付けられる（平二年四月）
（二）憧れの神田・本郷・早稲田（平四年五月）
（三）古本屋巡りはペイするか（平五年一月）
（四）古本屋巡りは万病の元？（平五年二月）
（五）目の毒な看板（平五年十一月）
（六）神田の古本屋は日本一安い？（平六年六月）
（七）わが秘密の古本屋（平八年一月）
十二、おわりに
《付》九州の古書店・訂補

一、はじめに

前回は、読者の古本屋巡りへの興味を喚起するために、九州の主要な古書店の最新の情報を提供し、安い買い物の例を挙げてみたが、興味を持っていただけたであろうか。

今号では、古本屋巡りの実際について書いてみたいと思う。分量が多く、連載も考えたが、編集部のご好意に甘えて、読み切りとさせていただく。会員諸氏には、貴重な誌面を使い、申し訳なく思っている。

前回にも書いたように、この雑文を草する目的は、あくまで良い古書を安く手に入れるための工夫を、国語国文学の、特に地方に住む若い研究者に提供することである。したがって、次のようなことがらに興味のある方にとっては、この雑文は無縁であることをあらかじめお断りしておく。

（一）古書そのものについての詳しい知識、古書界の動向など
（二）珍本・奇覯書をめぐる発掘話
（三）マニア的発想による古書探索の方法

このうち（一）、（二）についてはすでにたくさんの本が出ていて、筆者のような者の出る幕ではない。また（三）は、どんなに高くてもとにかく欲しい本を手に入れたいという人のためには重要なことがらであるが、やはり筆者とは無縁である。

またこの雑文では、古書に関する専門用語をできるだけ使わないようにしたいと思っている。例えば、その筋では「古典籍」「古書」「古本」を区別して使うこともあるようだが、筆者にとっては全く無意味である。また、前回「掘り出し物」という言葉を何度か使ったが、これは「中央の大都市の古書店価格の数分の一程度の安い価格で買えた本」というほどの意味であり、珍本・稀覯書とは縁のない言葉である。ただ、前回「黒っぽい本」（出版後時間の経った絶版書・品切れ本）、「白っぽい本」（まだ定価で買える本）という言葉を注釈なしに使ってしまったが、これは古書店の紹介に便利なので再び用いることにしたい。

さて、前回も述べたように、私の古本屋巡り歴は、ほぼ二十年である。学部学生三年の頃、大学院の先輩に連れられて、福岡市の古本屋を見て回るようになったのがその最初で、以来ずっと続いている。就職して数年間の二十代後半は、古本屋巡りに不便なところに住んでいて、給料も安く、所帯持ちになったこともあって、古本屋巡りの意欲が低下したこともあったが、熊本在住となった七年程前からは、「憑かれた」ように古本屋を回っている。熊本には、まともな古書店が六、七軒あり、一般書・文庫・コミックなどのセカンドハンド本屋を含めると約五十軒の古本屋がある。九州には、まともな古書店が約百軒ある。全国には二千五百軒の古書店があるという。私は、普段は二、三日おきに熊本市内の古本屋を回り、月に一、二度九州各地の古書店に出掛け、年に一、二度は東京など中央の大都市や学会で出掛けた先の古書店に寄るという生活をしている。

このような状態が、今後いつまで続くか分からない。しかしどうも、身体が言うことを聞かなくなるまでは止まないのではないかと思う。それは、欲しい本が一向に減らないどころか、毎年毎年、幾何級数的に増えていくからである。私が専攻分野の古書探索に専念できず、あれこれと趣味の古本に手を出すタイプの人間であることもその理由の一つであるが、古書関係の単行本や雑誌を繰り返し読み、各地の古書店の目録を眺め、そして古本屋巡りを頻繁にしているうちに、世上にどのような古書が出回り、どのような価値があるのか、自然自然に分かって来て、かつては漫然と見逃していた本が、ある時から突然欲しくてたまらない本に変わる、ということがますます頻繁になってきたことが大きい。こうなると、古書の世界はまさに底無しと言っても過言ではない。

このようなことを言っても、古本屋巡りに興味のない人にとっては、時間と体力の浪費としか思えないかもしれない。また、古書には興味を持っていても、

古本屋巡りによって欲しい本がそうそう都合よく見つかるのかしらと疑問に思う人も多いだろう。確かに、十数年探し続けても、思ったような安い値段では見つからない本も多い。しかし、そういう本は、当面、図書館で見るなり公費で購入するなり他の方法を用いて利用すればよい。探索の楽しみはいつまでも続くのである。また、中央でさえ古書の払底が叫ばれ、古書価の高騰が嘆かれるこの時代に、筆者のように地方で古本屋巡りをしていても、「掘り出し物」は果たして期待できるかといぶかる向きもあるかと思う。それについては、前回の古書店の紹介と今回の文章でそれぞれに判断していただくよりほかはない。

二、古書の入手方法

この雑文では、各地にある個々の古本屋を自らの足で訪ねて古書を手に入れる際のノウハウについて述べることを主目的としているが、古書の購入方法には、他に古書目録による購入と、古書即売会での購入という二つの方法があるので、先にそれらについて若干述べておきたいと思う。私個人は、古書目録による購入と古書即売会での購入は、金額的にも冊数的にも僅かでしかないが、それはこの二つの方法を私が軽視しているからという訳ではなく、前者については実際の古本屋巡りの方がはるかに安く古書を入手できることが多いため、また後者については古書即売会が催される機会が地方都市では非常に少ないため、結果的にそうなっているに過ぎないのである。

（一）古書目録を利用する

古書目録には、いろいろな種類のものがある。形態的には、ひとつの書店が単独に出しているもの、数店が合同で出しているもの、古書即売会に合わせて出されているもの（やはり数店の合同目録の形態になっている場合が多い）、定期雑誌に載っているもの、などがある。また、地域的には、中央の大都市の古書店が定期的に出している目録と、地方の古本屋が随時出している目録とがある。以下に、いくつか例をとって、購入の実際に触れてみよう。

まず、その歴史に敬意を表して、古書専門の雑誌「日本古書通信」（日本古書通信社）から始めよう。昭和九年の創刊というから、六十年もの歴史をもつ由緒ある雑誌である。現在は、週刊誌と同じ判型（B5判）で、毎号大体八十ページ程度、月刊で一冊六百五十円で売っている。ファイルし易いようにパンチ穴もあけてある。内容は、古書を中心とした書物全般に亙る読み切り記事・連載記事と、全国各地の古書店の古書目録が中心である。その他に、各地の古書店の開店、店舗移転の情報、全国から送られて来る古書目録の紹介、そして随時催される古書即売会の情報なども載っている。読み切り記事・連載記事は、その道に精通した人によるものが多く、私のような駆け出しの読者には読むのが苦痛な記事も少なくない。全国各地の古書店の目録は、各店一～二ページで、毎号四十店弱が載せてある。内容は、大部分が人文・社会科学関係の古書で、自然科学は少ない。

古書専門の雑誌には、もう一つ「彷書月刊」（弘隆社）がある。こちらは、昭和六十年創刊の新しい雑誌で、A5判（月刊総合雑誌などと同じ判型）、毎号八十ページ程度、月刊で誌代六百円である。内容は、毎号特集記事を組むのが特徴であるが、古書に関するものに限らず、広く書籍文化の周辺にまで取材しているので、時には、なぜこんな記事が必要なのかと首をかしげたくなることもある。雑誌の後ろ半分は、「日本古書通信」と同様、全国各地の古書店の目録で、各店原則として一ページ、毎号三十数店が載っている。古書内容は、「日本古書通信」が比較的堅い本中心であるのに対して、漫画や写真集など軟らかいものを扱う店が毎号必ず載っているのが特徴である。その他に、古書即売会などの情報や古書目録名の紹介があるのも、「日本古書通信」同様である。

この二つの雑誌の入手方法は、直接出版社に申し込んで定期購読するのが一番確実であるが、両誌とも最低半年分の誌代前納制になっているので、私は毎

号本屋で購入することにしている。「彷書月刊」は少し大きな店であれば、新刊本書店にも置いてあることがあるが、「日本古書通信」は新刊書店では扱っていないようだ。私は、両方とも熊本の代表的な古書店で購入している。

次に、一つの古書店が単独に出している古書目録について。まず、われわれ国語国文学研究者におなじみの目録と言えば、東京の国語国文学専門の古書店が出している次の四種であろう。「八木書店古書目録」、「日本書房目録」、「西秋書店古書目録」（以上神田）、「渥美書房国語・国文学文献目録」（早稲田）。いずれも二百頁を超える大部の目録である（発行時期は、前三者が秋から年末にかけての年一回、「渥美」は年に二、三回）。これらは、古書の目録であると同時に、現在手に入る国語国文学関係書物の総合リストの役目も果たしていると言えるから、いろいろな意味で是非手元に置いておきたい目録である。これら四種の目録を常備しておけば、たいていの場合に間に合うと思う。ただ、出版点数から言えば圧倒的に多い近代文学関係の古書については、物足りないと感じる向きもあるかと思う。その渇を癒す目録としては、「文泉堂書店近代文学総合目録」（神田）が挙げられるだろう。次に、それぞれの目録の記載内容の特徴をもう少し細かく説明しておこう。

「八木」…最新版は平七年十一月発行。総三二四頁。写真版一六頁、全集・叢書・書誌一〇頁、言語学・国語学三七頁、古典文学一一一頁、近代文学一三二頁などとなっている。一万三千点の古書を書名・著者名・出版社名・刊年・古書価の順に掲載。雑誌・新書・文庫も若干載せている。総合的には最も充実した目録であるが、近代文学の文学論・文学史関係の古書が少ないのが残念である。数年前まではかなり載せていたので、復活を強く望みたい。古書価は四種の中では最も高く、神田の上限価格と考えて差し支えない。

「日本」…最新版は平七年十月発行（第五四号）。総二四八頁。全集・叢書・辞書・索引等四〇頁、言語学・国語学・国語教育五七頁、古典文学一〇九頁、近代文学一五頁などとなっており、明らかに国語学と古典文学中心の目録である。一万点余りの古書を書名・著者名・刊年・古書価の順に掲載しているが、個人の単著の場合、出版社名を載せていないのが欠点である。古書価格は、八木に比べるとかなり安いようで、特に国語学では地方書店の価格とあまり変わらないものも少なくない。

「西秋」…最新版は平七年十月発行。総二二五頁。全集・叢書・雑誌・辞書等一七頁、言語学・国語学二八頁、古典文学七三頁、近代文学一〇一頁、児童文学八頁などとなっている。総合的な目録と言ってよいだろう。頁数は少ないが、昔から児童文学を軽視しない点は好感が持てる。一万一千点余りの古書を「日本」と同じ順に掲載。やはり出版社名を載せない本が多く不満を残す。古書価格は、「八木」と「日本」の中間という印象である。

「渥美」…最新版は平八年一月発行（第四一号）。平七年には一月、六月、十月にも発行しており、さらに雑載号も随時出すという目録発行に熱心な店である。最新号は総二二六頁。言語学・国語学二三頁、国語教育・児童文学二九頁、古典文学三八頁、近代文学一二四頁などとなっている。一万二千点余りの古書を載せているが、やはり出版社の名前を省略するものが多い。特徴として、古書の形態（頁数や判型、本の痛み具合など）を大雑把ではあるが示していること、内容的には国語教育・児童文学に力を注いでいること、近代文学において研究書・評論に限らず、個人作家の作品もかなり多く載せていることなどが挙げられ、特徴ある目録となっている。古書価格も早稲田の古本屋らしく、四店の中では最も安い。

「文泉」…最新版は平七年十月発行（第三九号）。総三一六頁。文学全集（日本・海外）・叢書七七頁、作家論・作品論二二八頁などという内容。これまでに出された全集・作家論・作品論の書物がほとんど網羅されており、どういう本が出たのかを知るには最適の目録である。近年価格表に空欄が目立つ（在庫切れを意味する）が、一店で収集できる古書には限界があり、やむをえないことであろう。しかし、私などの文学史・文学論の古書の方に興味のある者に

とっては、それに割かれる頁数がいかにも少ないと不満に思っていたところ、ついに平七年版に至って文学史・文学論の古書が全く姿を消してしまった。毎年陸続と出版される作家論・作品論の掲載だけで精一杯という状況に立ち至ったのであろうが、まことに残念なことである。古書価格は、近代文学関係古書の我が国における上限を示していると考えて差し支えない。

これらの目録は、たいていの大学の国語国文学研究室に送って来るから手にすることは難しくはないと思うが、大学によってはいわれのない差別を受けることもあるかも知れないから、確実に手元に置くためには、やはり何度か注文してみることが必要である。それも多量、高額であればあるほどよい。そのうち顧客リストに挙げられ、大学よりも早く目録を送ってくれることもあるだろう。その上、注文を繰り返していれば、店によっては、複数希望があった場合本来抽選にするところを、優先的に回してくれる場合もないとは言えないのである。私自身は、目録購入はできるだけ公費で済ませているのだが、「渥美」に限り、しばしば私費注文している。最近は、顧客リストにあがっているらしく、注文即全品送本の恩恵に与かっているようである。

なお、上記の東京の国語国文専門の古書店の目録のほかにも、国語国文関係図書を含む目録を出している店が少なくないので、いくつか紹介しておこう。大学によく送って来るものとしては、「一誠堂古書目録」（神田、文系古典籍・古書一般）、「思文閣古書資料目録」（京都、同）、「岩野書店古書目録」（名古屋、文系古書一般）がある。これらは、むしろ先述の国語国文専門の店よりも高い値段をつけているという印象である（思文閣は本によってはやや良心的である）。

次に、地方の古書店が単独に出している目録について。近年、地方でも多くの古書店がこの目録による通信販売に力を注ぐようになった。九州に限っても、十年ほど前までは、二、三軒しかなかったものが、最近は、筆者が知っている店だけでも十数軒の古書店が目録を発行している（前回の古書店の紹介でも述べた）。その主な理由は、古書の売れ行きが落ちて、店売のみでは経営が難しくなり、全国の古書探索者を対象とせざるを得なくなったためと考えられる。これらの目録は、三百ページにも及ぶ堂々たるものから、僅か数ページの小冊子に至るまで形態は様々であるが、内容的には郷土関係文献にページを割いているものが多く、国語国文関係古書の情報量は概して少ない。しかし店によっては、店頭に置かない古書を掲載していることもあるので、やはり手に入れておくに越したことはないであろう。どの店がどんな目録を出しているかは、「日本古書通信」や「彷書月刊」の目録情報で知ることができることは前に述べたが、目録が全国の古書探索者の目に触れることを考えれば、発刊後できるだけ早く手に入れる必要も出て来る。そのためには、まずやはり何度か実際に目録購入して、顧客リストに挙げてもらうことが先決である。

これら地方の目録の古書価格は、例外もあるが、大体において中央の価格より三割～五割方安いようである。そして時には、一桁違うのではないかと目を疑う安価が付けられていることもある。ここ数年の目録から拾ってみると、『文學理論の諸問題』（平林初之輔、昭四）が二千円、『形式主義藝術論』（中河与一、昭五）が三千円、『志賀直哉の手紙』（武者小路実篤編、昭一一）が千五百円、などである。目録が届くと同時に注文のハガキを出したが、みな抽籤外れであった。おそらく注文が殺到したのであろう。とにかく、入手できるか否かは他人任せではあるが、古書を安価で購入するためには、これら地方の目録をたくさん集めることも一つの方法である。

さて次に、これらの目録によって実際に注文する時の注意事項について述べておこう。基本的には、いくつかの目録を相互に比較して、一番安い店に注文を出すのが常套であるが、安いということがくせ者である場合があるので、注意しなければならない。

第一は、目録注文が、古書の実物を見ないままに注文を出さざるを得ないところからくる問題である。注文する側は、古書がどのような形態のものかわか

らない。したがって、運よく送られて来たものが、期待に背くものであることがないとは言えない。例えば、箱があるはずのものが無かったり、書き込みがあったり、稀には落丁・乱丁があったりすることがある。先述の五大目録も、「渥美」を除いてこれらの点についてはほとんど注意書きをしていないので不安は拭えない。私は、「渥美」以外、ほとんど私費注文したことがないので明確なことは言えないが、「渥美」でも一度だけ箱無しのやや痛んだ本が送られて来たことがある。しかし、それは目録を良く見ていなかった自分に非があったので、箱があることはどこにも書いてなかったのである。その本に注文を出したのは、前々から欲しかったもので、古書価格が相場より相当に安かったためである。この価格の安さが、その本の形態からくる場合があることを心得て置く必要がある。

第二に、古書には価格の相場があり、こういうことはめったにないのであるが、いくつかの古書目録を比較して、同じ本が目録によって極端に価格の違うことがある。この場合もひとまず警戒する必要がある。例を挙げると、前回の九州の古書店紹介で、『音曲玉淵集』の古い翻刻本を久留米の古書店で四千円で購入したことを書いたが、その後間もなく神田から送られてきた目録の一つに二千八百円と付いているのを発見して、がっかりしたことがある。別の古書店の古い目録では万単位の値段がついていたので、かなりの掘り出し物と考えてしまったのである。この極端な価格の違いの理由は、恐らく昭五十年代初めに京都大学から出された影印本の存在であろう。学問的には当然こちらを利用すべきで、不完全な翻刻本には骨董的な価値しかないと考えたのが、安い方の古書店ではないかと思う。このように、古書店によって、学問的に耐え得るものを重視する店と、骨董的ではあっても稀少性の高いものに高い値をつける店があるのである。

また、品切れ中の本が、判型などが変わって復刊された場合も、その元本に対する古書店の価格の付け方に大きな違いが出ることがある。例えば、『口語法精説』（湯澤幸吉郎）は、昭二八年に明治書院からB6版（正確にはそれよりやや大きいいわゆる四六版）で出て、昭五二年に同店からA5版（正確にはそれよりやや大きいいわゆる菊判）で復刊されている。平八年二月現在品切れ中で、復刻版の古書価は一万二千円～五千円程度である（原価は三千八百円）。この復刻版は、内容的には元本の明かな誤植を訂しただけのもので、全く同内容といってよいものである。したがって研究に元版を用いても差し支えはない。しかし、古書価の扱いは店によって違っている。東京神田の国語国文学専門古書店を比べてみたところ、ある店は復刻版同様一万円台の値をつけ、ある店はぐっと値を下げて二千円程度にしている。この場合、本の外見上の古めかしさが気にならなければ二千円程度の元版を購入した方がお得ということになろう。私は、元版の方は平三年に大阪吹田市の古書店で三百五十円で入手し（原価三百八十円）、復刻版の方は最近北九州市の古本センターで二千五百円で入手しており、どちらも掘り出し物だったと思っている。

さらに、目録注文で気をつけておいた方がよいことは、元版とその増補版のある研究書の場合である。この場合は古書店によって極端な値段の違いが出ることは少なそうであるが、増補版に比して、元版の値段は相当に安くなる。値段の安さに釣られて元版と気づかずに注文して失敗することのないよう注意したい。これは、目録注文に限らず、実際の古本屋巡りにおいても言えることである。私自身もその苦い経験があるのでついでに書いておきたい。『音韻論』（有坂秀世、三省堂、昭一五）は国語学研究者必読の基本文献である。私はこの本の、紙質が極端に悪く、刊記の剝落した本（箱もなかった）を学部学生三年の時に福岡市の古本屋で入手した。恐らく戦後まもなくの頃の重版本なのであろう。購入価格は千二百円。古本屋巡りを始めたばかりの頃で、初めての堅い研究書の獲物に小躍りして、研究室で吹聴したところ、先輩から「それなら、増補版の箱入り新本が二千円位で買えるよ」と失笑を買った。研究室の本で確かめてみると、増補版は元版に短い論文が一つ加わっただけのものなのだが、

その時は自分の買った本がいかにも価値のないもののように思えて、みじめな気持ちになった覚えがある。古本屋巡りにもさまざまな勉強が必要であることを初めて知った経験である。これ以来『音韻論』には特別の思い入れがあり、現在手元の書棚には、昭一五年の箱入り初版本と昭三四年初版の箱入り増補版と合わせて三冊の『音韻論』が並べて置いてある。

同じ本が目録によって極端に値段の違うことは、さらに別の理由によっても起こる。それは、品切れ中だった古書が再刊されたり、著作集に収められたりした場合である。この場合、新価格は古書価格よりぐっと下がることが多い。したがって新しい古書価格は新刊価格とほぼ同じに下げるのが普通である。しかし、大量の古書を扱う店では、時にこの事実を把握できず、以前の価格のままか、さらに上げて目録に掲載してしまうことがあるのである。一方の古書店がその事実を知り、他方の古書店がその事実を知らない時に、極端な価格の違いが現れるのである。また特に著作集として再録された場合、元版と全く違った本の形態となるためか、店によっては意識的に元版の古書価を保持するところもあるようである。例えば前回の九州の古書店の紹介のところで出した『作品論の試み』（三好行雄、至文堂）は、著作集に再録後、それまで二万円前後していた古書価を五千円以下に下げたところが多いが、神田の近代文学専門の古書店は万単位の価格に留まっている。著作集の発刊後すでに数年経っているから意識的な行為だろうと思う。確かに元版は濃いブルーと黒の箱の印象的な本の装幀で、値段を極端に下げたくないという気持ちも分かるような気がするのである。これらの場合も、複数の目録をよく比較してみることで、注文の失敗を防ぐことができる。

なお、私の経験から言えば、古書目録には、必ず古書店に在庫している本が載っているとは限らないということも心得ておいた方がよいと思う。学生時代、児童文学の創作と評論に興味を持っていて、実際にクラス雑誌に書いたりしていたことがある。書店に行けば必ず児童文学書のコーナーを覗いていたが、置いてあれば必ず買っていたものに、地元のグループが出していた何種類かの同人雑誌がある。その一つのバックナンバーが平三年の東京の古書店の目録にまとまって出たことがある。雑誌名を『九州童話』という。九冊四千円とあったので、すぐに注文し、運良く送られてきたのである。ところが、その翌年の目録にも、翌々年の目録にも全く同じ名前が載っており、とうとう四年ほど抹消されないままになっていた。多量の古書を扱う店ではこういうこともあるのである。私の後に、注文した人がいるかもちろんわからないが、もしそういう人がいたならば、まことにお気の毒なことだと思う。

（二）古書即売会・古書市に出掛ける

古書の入手方法の第二は、数店の古書店が古書を持ち寄って合同で開く即売会、古書市に出掛けることである。即売会の会場は、中央の大都市の場合は、デパート・古書会館・路上広場などいろいろであるが、地方ではデパートやスーパーで催されることがほとんどである。そして、大都市では毎月のように何らかの形で古書即売会があるのに対して、地方では、特定の会場では年一回が原則で、催される頻度はかなり低い。試みに、昨年（平七）私が出掛けて行った九州での古書即売会の会場を列挙してみよう。

北九州黒崎井筒屋デパート（一月）
柳川寿屋スーパー（二月）
北九州小倉そごうデパート（七月）
佐賀玉屋デパート（十月）
熊本スーパーサニー（十月）
北九州小倉井筒屋デパート（十月）
熊本鶴屋デパート（十一月）

この他に、過去に大牟田の玉屋デパート、久留米のショッパーズ久留米、大分の近鉄デパートなどの古書市に出掛けたことがある。私の学生時代には、福

岡市でも古書市が盛んで、岩田屋デパート・井筒屋デパート・玉屋デパートなどで大きな古書市があったものだが、近年は衰微してしまっているのはまことに残念である。宮崎・鹿児島などでも小さなものはありそうであるが、情報が伝わって来ない。

これらの古書市は、大体毎年決まった時期（月）に催されるが、変更されることもある。地元の古書市であれば、新聞チラシやデパートに掛けられた垂れ幕などで開催時期を知ることができるが、他県の場合はわからないことも多いので、開催情報を他の方法で摑まなくてはならない。その一番良い方法は、古書を出品する店から、内容目録を送ってもらうことである。私の場合は、九州各地の古書店から自家目録・合同目録を取り寄せているので、その店が古書市に出品している場合は、必ず送ってくれる。そうでない場合は、一度それぞれの古書市に出掛け、受付で次回以降の開催時に目録を送ってくれるよう頼んでおくと良いと思う。

さて、肝心の古書即売会での古書購入についてであるが、これについては経験が少ないので大したことは言えないというのが本音である。古書即売会の実態について書かれた本はたくさんあり、それらによると、特に中央の大都市の古書即売会は、女性客がどっと押し寄せるバーゲンセールに似た狂態を呈するという。古書市初日は、開店前から会場に列ができ、開店と同時にエレベーターに殺到し、押し合い圧し合いしながら会場になだれ込むという。この辺のことは、例えば『古書街を歩く』（紀田順一郎、新潮選書、昭五四、新版は福武文庫、平四）に活写されているので参照してもらいたいのだが、人の密集の中にいることが嫌いな私は、まだ一度も開店と同時に会場に入った経験がない（これだけで、古書即売会の利用者としては既に失格なのかもしれない）。したがって詳しいことは言えないが、たまたま熊本鶴屋デパートで昨年（平七）十一月に催された古書市に開店時に入った学生に聞いたところでは、大都市ほどではなくてもやはり開店を待つ人の列ができており、エレベーターも満員で、会場に着いた時には既にレジでお金を払っている客がいたという。私は、なるべく初日には顔を出すことにはしているが、早くても昼頃である。この時間になれば会場も少しは落ち着いた雰囲気になっているようだ。

即売会に出品される古書は、普段は各古書店の棚に置かれているものも多いが、そうでないものもあるので、頻繁に古書店巡りをしてどういう本があるかおおよそ摑んでいる私も、一応はすべての本に目を通して行く。しかし、掘り出し物にはめったに出会わない。まず、値段が安くない。これは、デパートなどのフロアの一角を一定期間（たいていは一週間程度）借りるために相当の借料を古書店が払っていることとも関係があるようだ。それに、地方の即売会ではどうしても郷土関係の古書を重視する傾向があり、国語国文の堅い専門書が少ないのである。

しかし、そうであっても古書即売会には顔を出さないよりは出した方がよいようである。即売会の前には、たいてい目録が作られ、大学や個人宛てに送ってくるが、この目録には会場に出品される古書の一部が掲載されているだけである。狙い目は、まさにこの目録に漏れている古書にある。私の僅かな経験でも、掘り出し物がないわけではないのだが、それはすべて目録漏れの古書である。前回の古書店の紹介の長崎県の店で例に出したのだが、『中野重治研究』（旧版全集別巻、平野謙編、筑摩書房、昭三五初版本、購入価千五百円、古書価一万八千円（文泉堂書店、平二）、平二購入）は、熊本鶴屋デパート古書市で入手したものである。その後、これといった掘り出しに巡り会えなかったのであるが、先述の平七年十一月の同古書市では、多くの良書をびっくりするような安価で手に入れることができた。以下に列挙してみよう（古書価格はいずれも文泉堂書店平七年版目録による）。『石川淳』（井澤義雄、彌生書房、昭三六初版本、購入価七百円、古書価九千八百円）、『絶対零度の文学　大岡昇平論』（中野孝次、集英社、昭五一初版本、購入価六百円、古書価一万二千円）、『論集・小林秀雄Ⅰ』（大岡昇平他編、麥書房、昭四一初版本、購入価千五

百円、古書価一万八千円）、『書誌　小林秀雄』（吉田熙夫他編著、図書新聞社、昭四二初版本、購入価千五百円、古書価九千五百円）、『物語芸術論　谷崎・芥川・三島』（佐伯彰一、講談社、昭五四初版本、購入価七百円、古書価九千八百円）。これらの本は普段よく立ち寄る古書店が出品したものであるが、目録にはもちろん無く、自店にも出していなかったものばかりである。これらがもし東京の古書即売会に出ておれば、開店と同時に無くなっていただろう。地方の古書市であったことに感謝しなければならないと思ったことだった。また、最近でも、北九州小倉のそごうデパートで開かれた即売会（平八年一月）で、『洋学資料と近代日本語の研究』（松村明、東京堂出版、昭四五初版本）を三千五百円で見つけて狂喜した（原価五千五百円、古書価は五万八千円（八木書店、平七））が、これも目録には掲載されていなかったものである。この古書即売会の目録には、ここ十数年安価で手に入れたいと思い続けてきた『日本語音調の研究』（平山輝男、明治書院、昭三二）が載っていたのであるが、価格は五万八千円で、こちらは神田の古書価格に劣らないものであった（もちろん会場で実物を手に取ってため息をついただけである）。『洋学資料と近代日本語の研究』の方は、あるいは、ゼロを一つ付け忘れたのかもしれない。目録に載せるものは古書価格に十分注意するが、そうでないものにはこういうことが起こり得るのである。

なお、古書市には初日に出掛けることが必須なのは当然であるが、掘り出し物が見つからなくても、それですぐに諦めない方がよい。会場の展示スペースが狭い場合、二日目以降に古書を補充する場合があるからである。したがって、古書市の期間中、最低二度は顔を出すということも大事である。

三、古本屋巡りに出掛ける前に

（一）蔵書目録を整備する

古本に関するエッセーなどでは、よく「旅行先でふらりと立ち寄った古本屋で、面白いものを見つけた」といった文章を見ることがある。確かに、そういう古本屋の楽しみ方もあるだろう。しかし、ここではあくまで意識的に古本屋を訪ね、研究に必要な古書を手に入れることを目的とした古本屋の利用法にこだわる。そのためには、やはりそれ相応の準備が必要となるのである。

古本屋に出掛ける前にすべき第一は、今自分の手元にどういう本があり、どういう本がなくて入手する必要があるのかを明確にしておくことである。古本屋巡りの初歩のうちは、蔵書も多くないから、記憶に頼っても失敗することは少ないが、数千冊の蔵書になれば、記憶もおぼつかなくなる。特に、自然に蔵書量が多くなる新書本・文庫本や、叢書物・シリーズ物の欠本はなかなか記憶できない。また、高度な専門書でなく、一般向けに書かれた本には似たような書名が多く、記憶違いも起こり易い。既に買った本を再び買うことのないよう、またまだ買っていない本を買ったつもりで見逃すことのないようするためには、どうしても蔵書目録を作る必要が出てくるのである。そして、それは古本屋巡りに携行できるような、ハンディ、コンパクトなものでなければならない。

蔵書目録の作り方にマニュアルというものはない。自分の最も使いやすい形を工夫すればよいのである。ここでは、一応私のやり方を紹介するが、私自身まだ模索の状態で、最善の方法を見いだせずにいる。すでにこれはという良い方法を実践している人がいたら、是非ご教示願いたいと思っている。

私の場合、国語学・言語学の専門書については現在も大体記憶しているので、蔵書目録を古本屋巡りに持っていくことはまずない。概説書などでは同名の本も多いが、これは著者名で大体記憶しており、やはり間違いは少ない。私が古本屋巡りに常に携行するのは、雑誌のバックナンバーと、全集・叢書物の欠本表、そして新書・文庫本の既買リストである。それらも、蔵書数が増えてくると、書名・著者名などをいちいち書き込んでいては相当にかさばってくるので、今ではその本を数字だけで示す方法に変えている。例えば、雑誌のバックナン

バーでは巻号のみ一一（第一巻第一号）などと書き、新書・文庫本では通し番号のみ書いている。そして、初版本の場合はその数字にアンダーラインを付している。新書・文庫の場合は、これでほとんどの場合間に合うようである。特に新潮文庫・角川文庫は出版順に番号が打たれているので簡単である。岩波文庫・旺文社文庫も、番号の打ち方がやや変則的であるが、数字だけで事足りる。近年スタートした文庫では、通し番号でなく著者・分野などの別によって仮名と数字を交えたものもあり、やや面倒ではあるが書名・著者名を書き込むよりはまだ簡単である。

問題はこのようなリストをどのような形で、ハンディ、コンパクトなものにするかであるが、私は最初のうち、ワープロで打ったものを手帳に貼り付けて持って行っていた。しかし頻繁に古本屋巡りをするようになって、特に文庫・新書を購入する回数と冊数が急激に増えるようになってくると、数日で貼り替えをしなければならなくなる。今では、手帳を用いるのはあきらめて、B5の感熱紙に9ポイントほどの小さな活字で、行間をぎりぎりに詰めて印字したものをそのまま折り畳んで古本屋巡りに持っていくようになった。これだと数千冊の文庫・新書が十枚足らずの感熱紙に収まる。そして、新たに買った文庫や新書の番号を四周の隙間に書き込み、ひと月くらいでワープロを打ち直して、次の古本屋巡りに備えるのである。ただ、このやり方だと、蔵書の最低限の情報しか持っていけず、購入日・価格などのほか、本の形態（カバーがあるかないか、痛み具合はどうか、書き込みはないかなど）については無視せざるを得ない。文庫・新書に限らず、手持ちの古書のあらゆる情報を一覧でき、しかもハンディ、コンパクトなものを作る手立てはないかと思案中であるが、妙案は浮かんでこない。いっそ、誰か「蔵書くん」とでも名の付いた、電子手帳用のソフトを開発してくれないだろうかと思っているところである。

（二）一日のスケジュールを立てる

自分が住んでいる都市の古本屋を回る場合は必要のないことであるが、遠方の古本屋を一日で回るような場合は、大雑把でよいからあらかじめ時間の配分をしておいた方がよい。後にも述べるが、古本屋は午前十時から十一時頃に開店し、午後七時頃閉店する店が多い。これをまず頭に入れておき、目的地までかかる時間や、店から店への移動に要する時間、さらには一店を見る時間を計算して、どの店を最低限回るか決めてから出掛けた方が無難である。遠方の古本屋巡りでは、どうしても、折角来たのだからできるだけ多くの店を回りたいと思うのが人情であるが、そのことばかり頭にあると、一店での探書時間が短くなり、うっかり良書を見落とすということもある。学生を連れて古本屋巡りをしていると、このことがよく分かる。私は、一店を見る時間がまず誰よりも長い。国語国文学関係の本ばかりでなく、趣味の古本も探すからということもあるが、思わぬところに良書が埋もれていて、危うく見逃しかけたという経験を何度も重ねてきているからである。古典文学専攻の学生を連れて行って、学生たちが見終わって店の外で待っているところに、「こんな本があったけれど」と示すと、「気がつきませんでした」と言うことがしばしばである。一店を見る時間は、古本屋の規模にもよるが、どんなに小さな店でも最低三十分は取りたいところである。これらのことを考えて、時間的に余裕のあるスケジュールを立てることをお勧めしたい。

四、効率的に古本屋を回るために

前置きが随分長くなってしまったが、ここからが古本屋巡りのノウハウである。まず、大事なのは、限られた時間内に、できるだけ効率的に古本屋を回る工夫をすることである。それによって、古本屋巡りに要する経費を節減できる上に、良い古書、安価な古書に巡り会う確率も高くなる。ここでは、九州内の、比較的まとまった数の古本屋がある主要都市を、日帰りで回る場合を想定した

工夫のあれこれを述べてみたい。

（一）古本屋巡りの曜日と時間について

当たり前のことであるが、古本屋巡りをするためには、目指す古本屋が開いていなければ何にもならない。これだけは、回る方の勝手にならないものである。しかし、大ていの古本屋には定休日がある。しかも定休日は古本屋によってまちまちである。そこで、目指す都市の古本屋がすべて、そうでなくても大部分開いている日を選んで古本屋巡りをする必要が出てくる。何曜日に古本屋巡りに出掛けるか。これはむつかしいことではない。それぞれの古本屋の定休日を調べ、定休日が全くか、ほとんど重ならない曜日を選べばよいのである。『全国古本屋地図』には、主要な古本屋の定休日が載っている。これを、曜日ごとにまとめてみると次のようになる。（平四～平五年改訂新版による）

祭日定休	七六軒
日曜定休	三九〇軒
月曜定休	八五軒
火曜定休	一二四軒
水曜定休	一六六軒
木曜定休	一三四軒
金曜定休	二三軒
土曜定休	五軒

ざっと数えた数字であるが、定休日の傾向は明瞭である。一日で古本屋巡りをするなら土曜日、二日かけるなら金曜日・土曜日ということになる。

九州の古本屋も傾向は変わらない。やはり日曜日の定休日が多く、それに次いで火曜日が要注意である。九州の代表的な古本屋である佐藤書店本店・今井書店（北九州市）、葦書房（福岡市）、河島書店・天野屋書店（熊本市）などが火曜日定休となっている。遠方への古本屋巡りの場合は、これらの曜日を外した方がいいだろう。一番安全なのは金曜日と土曜日で、この日に定休日を設けている九州の古本屋は一軒もないようだ。

次に、古本屋へ出掛ける時間帯であるが、これも古本屋の開店閉店の時間を調べることによって決めることができる。細かいことは省略するが、大ていの古本屋は、午前十時から十一時頃開店し、午後七時頃閉店するようである。ただ、新しい店や、文庫本・コミックを中心としたユーズドブック屋は、午後八時以降も開けている所が多いから、老舗を先に回り、時間の余裕がある限り、その他の店を回るとよいだろう。私が遠方へ古本屋巡りに出掛ける時には、午前十時までに目的地に着くように出発し、午後九時頃まで粘って、それから帰途につく場合が多い。

（二）古本屋は一人で回る

このことについては、多言を要しないと思う。古本屋を複数の人間で回るのは、まず時間的に無駄が多い。一人一人の興味の対象が違えば、当然一軒の古本屋を見る時間が違ってくるからである。私のように、専門の古本ばかりでなく、趣味の古本を見るのにも時間を掛ける人間が一番迷惑をかけるだろう。そういう人間も、先に見終わった人が外で待っているのを気にしながらでは、落ち着いて古本を見ることができないのである。

また、一人が良い古書を見つけた時に、それが同行している人間にとっても欲しい本であった場合、早い者勝ちとはわかっていても、お互い内心穏やかでなくなることもある。これは、専門を同じくする人間同士で回る際に起こりやすいことである。

そういうわけで、私は古本屋巡りはできるだけ一人ですることにしている。例外的に、遠方からの知人を地元の古本屋に案内したり、自分の大学の学生・院生を連れて行くことはあるが、その時は自分の古本探索は半ばあきらめているのである。学生の頃、私が大学院の先輩にくっついて古本屋巡りをしていた

ことは、前に書いたが、当時の先輩の気持ちも今の私と大して変わらなかったのではないかと思う。いやな顔一つせず、古本屋巡りに付き合って下さった先輩に、今はただ感謝するのみである。

（三）古本屋巡りの七つ道具

《資金》

古本屋巡りに出掛ける時、諸経費を含めた資金はどれくらい持って行くか。これは人それぞれであるが、私の場合は、現金は三～四万円程度である。九州の一都市を一日で回る時には、それでほとんど間に合うと思う。ただ、全集物や高額の古書が思いがけず安い値段で見つかることも全くないとは言えないだろうから、その時の用意に、銀行口座を作っておいて、カードを持参しておくのも良いだろう。今はほとんどの銀行がオンラインになっているから、資金が足りなくなっても、銀行さえ見つければ、いつでも下ろすことができる。ただ、銀行が開いている曜日と時間を頭に入れておく必要はある。

《車》

遠方への古本屋巡りの足には、車・列車・バスの三通りが考えられるが、経費を低く抑えるためには、絶対に車が有利である。

私の車は、一五〇〇ccの大衆車であるが、もともと前任地宮崎から郷里の長崎までの帰省のことを考えて購入したものだった。まず、小さい子供がいたので、長距離（宮崎から長崎までは、高速が完成していなかった頃、途中のフェリーの時間まで含めると九時間もかかった）の運転でもそれほど疲れないことが条件だった。加えて、比較的燃費が良いことも必要で、一五〇〇cc位の車がちょうど良いと思ったのである。長く乗っていると、乗り心地に次第に不満を覚えるようにもなるが、まずは合格点を与えることができると思う。そして、遠方への古本屋巡りの足としても、このクラスの車が一番良いのではないかと思う。

例えば、熊本から福岡へ古本屋巡りに出掛ける場合、特急列車であれば往復割引で四九〇〇円、高速バスでは往復割引で四一〇〇円である。これに対して、車の場合はどうか。私の車は、市街地では一リッターでほぼ一二キロ走る。熊本のガソリン価格は、大体一リッター一一五円程であるから、一キロ走るのにほぼ一〇円かかることになる。熊本から福岡までは片道約一一〇キロであるから、往復で二二〇〇円程で済む計算になる。実際は郊外も長く走るから、もっと少ない金額で済むのである。古本屋巡りをしている間、普通の駐車場に置いていたとしても、列車やバスで行くのに比べれば、やはりかなりの安上がりであることは間違いない。

ただ、車の場合は、列車・バスに比べて、目的地までの時間が余計にかかる欠点がある。熊本から福岡へ行く場合、車だと三時間はかかる。特急列車では一時間半で済むのである。しかし、列車の場合は、自宅から駅まで行く時間と、駅での待ち時間、駅から古本屋まで行く時間を勘定に入れていないから、実際は両者の差はもっと縮まるのである。

また、車の場合は、小さいながらも自分の城というわけで、運転中に好き勝手なことができる。私のように、缶コーヒーを飲みながらタバコをふかし、カーステレオをがんがん鳴らすような人間は、行儀良さを要求される列車やバスの中では、精神的に辛いのである。

もう一つ、車の便利な点は、どれほど多く古書を買ったとしても、帰りが全く苦にならないということである。車のトランクに入り切れないほどの古書を買うということは、九州の古本屋を一日や二日で回る時には、まずあり得ないことである。良い古書をたくさん買っても、両手いっぱいにぶら下げて、列車やバスを乗り降りするのは、かなりきつい。

車の良さばかり強調したようだが、やはり弱点もある。まず一つは、精神的なもので、古本屋遠征で目ぼしい成果がなかった場合、帰りの道が何とも空しく、時間が長く長く感じられることである。列車やバスの場合は、腹立たしさ

を紛らすために一杯ひっかけて、眠りながら帰ることもできるが、車ではもちろんできない。古本屋遠征では、こういうことも覚悟の上で出掛ける必要があるが、実際は、私の経験では、そういうことは今までほとんどなかった。

車で古本屋遠征をする場合に、最も頭を悩ますのは、何と言っても駐車場の問題である。駐車場付きの古本屋がたくさんあれば別であるが、九州にはそのような店は、文庫やコミック中心のユーズドブック屋以外には、まずない（九州以外でも同じだろう）。したがって、遠方へ古本屋巡りに行く時には、駐車料金が安くて、古本屋巡りに便利なところを探して駐車することになる。まず、当然ながら一番良いのは、駐車料金ゼロの所に止めることである。これには、いくつか方法がある。一つは、古本屋近くに、コンビニエンスストアがあれば、そこに駐車しておくことである。しかし、私はそれだけでは不安なので、その店で申し訳程度に何かを買って袋に入れてもらい、その店の袋であることがわかるようにして助手席に置いておくことにしている。結果的に駐車料金ゼロでなくなるわけであるが、普通の駐車場に比べれば安くで済む。次の手は、古本屋近くにガソリンスタンドがあれば、そこで給油して、しばらく車を置かせてもらうというものである。他に、銀行などを使う手もある。しかしいずれも、そうそう都合良くそのような店があるわけではない。正真正銘の駐車料金ゼロという所で考えられるのは大学構内である。九州大学は近年規制が厳しくなったが、目的地を言えば臨時入構証を出してくれる。資料収集の目的で国文研究室に行くと言って出してもらえば良いだろう。若干の虚偽申請となるが、学問のためにやっていることだから、良心もそれほど疼かない。熊本大学の場合は、黒髪地区の北側キャンパスの入り口で、私の研究室に行くと言えばすぐ臨時入構証を出してくれる。そこから、近くのデラシネ書房に寄り、バスで通り町に出て、上通りアーケード内の舒文堂河島書店、天野屋書店などに行き、市街電車で水前寺方面に向かって、松永書店に寄るというコースを薦めたい。ついでに、駐車料金ゼロの場所で一度は使ってみたいと思っているのが、警察署の駐車場である。しかし、警察署のそばに都合よく古本屋があるところを、私はまだ一軒しか知らない（北九州折尾警察署そば）し、小心者の私には目下のところその勇気がない。

これらの方法が使えない時には、普通の駐車場に止めることになる。駐車禁止の場所にはくれぐれも止めないようにしたい。駐車違反の罰金は現在万単位である。どんなに良い古書が手に入ったとしても、罰金を取られては、喜びが半分以下となる。私は幸いまだ古本屋巡りで駐車違反をしたことはないが、他の理由で今までに二度犯して、自分が悪いとはわかっていても、その不快感はなかなか消えなかった。普通の駐車場も、できれば公営のものを使いたい。料金がかなり安いからである。例えば、佐賀市では、佐賀城内の駐車場が安い。古本屋もそこから近くて便利である。大分市では、大分駅の駐車場が一番だと思う（大分大学はあまりに遠い）。

《古本屋地図》

古本屋巡りに絶対欠かせないのが、古本屋地図である。これには、全国規模のものと地方で出ているものと二種ある。全国規模のものには、前にも触れた『全国古本屋地図』（日本古書通信社）と、『古書店地図帖』（図書新聞）がある。私が普通に使うのは前者である（定価は千八百円）。全国の主要な古書店名と所在地、電話番号、開店閉店の時間、定休日などの情報を載せている点は共通であるが、店舗までの道筋や扱う古書の特徴については、前者がはるかに親切である。後者は、新書本と大体同じ大きさの普通の判型で、前者がやや大きく横長の作りであるのより見やすいが、利用者があ然とするようなひどいミスがある。平二年新版の二九五頁に福岡市の地図が載せてあるが、ここに昭五十年代中頃までに全線廃止された市街電車の線路が未だに描かれているのである。たったこれだけで全体の記述の信用を疑う人がいても文句は言えまい。その他の情報が概ね正確であるだけに惜しいことである。前者は、九州の代表的な古書店に行けば大てい置いてある。ただし、これだけは古書として扱って

いないところが面白い。後者は、九州の古書店では私は見たことがない。私が今持っているのは、岡山の古書店で買ったものである。もちろん両者とも普通の書店に注文すれば取り寄せてくれる。なお、実際の古本屋巡りでは、どちらを用いるにしても、持ち歩くのには不便である。私は、目的地がはっきりしている時には、その都市の部分だけコピーして持ち歩くことにしている。

次に、地方の古本屋地図であるが、これはどの都市でも出ているわけではない。私が今持っているのは、九州では福岡市とその周辺のもの（「改訂ふくおか古書店案内」）、福岡県南部のもの（「〈筑後地区〉古書店案内図」）、長崎県のもの（「長崎古書店地図」）、そして熊本県のもの（「熊本古書店案内」）である。その他にも出ているかもしれない。内容は、全国規模のものと大して変わらないが、載せている店数がやや多いこと、扱う古書の傾向がやや細かく記述してあること、地図そのものが比較的わかりやすいことなどは、長所と言えば長所である。それに、パンフ状になっているので持ち歩くのには都合がよい。これも、その都市の代表的な古書店には大てい置いてあるようである。

このように古本屋巡りに必携の古本屋地図であるが、一度でもこれらを使った人は、すぐに一番肝心な部分が用をなさないことに気が付くはずである。というのは、これらに載っている地図は、ほとんどがデフォルメされているか、ひどく大雑把に書かれているために、目指す古本屋に速やかに着けないのである。これらだけに頼っていると、時間的にロスが多く、効率的に古本屋巡りをすることができない。そこで、次に必要なのが、古本屋の所在を正確に示す都市地図ということになる。

《都市地図》

「古本屋地図には、古本屋の住所が正確に載っているが、そこへ導いてくれるのが都市地図である。その前に、その都市に行くまでの地図も必要である。車に乗る人は誰でも持っているもので改めて言うまでもないが、九州一円の道路地図を一冊車に乗せておく。都市地図は、私は『九州全都市地図集』（昭文社）を使っている。これも持ち歩きには不便なので、目的の都市の部分をコピーして、古本屋の所在地に印をつけたものをポケットに入れている。都市地図のコピーはかなり見にくいので、気にならなければ、都市ごとに切り取ってしまうのが最善である。これで主要都市の場合はたいてい間に合うが、小都市になるともっと詳細な地図が必要になることもある。私が使っているのは、やはり昭文社の各都市地図である。飯塚・唐津・大村・島原・玉名・八代などの都市をこれに頼っている。それでも分からなければ、あとは古本屋に電話して直接聞くしかないが、その経験はまだ一度もない。」

以上は、二年前の前回の原稿提出時にすでに書いていたものであるが、その後一冊の道路地図を用いるようになって、右のような面倒がほとんどなくなってしまった。その地図とは、やはり昭文社から平六年四月に初版が出た『スーパーマップル九州道路地図都市詳細図』である。これはA4版、三八〇頁余りのかなり大きな地図帳で、値段も三千八百円と高いが、様々な点でこれまでのあらゆる道路・都市地図帳を凌駕する画期的なものである。まず、多色刷で、市町村の境界が明確にわかるのは言うまでもなく、市の場合は何区何丁目まで色分けされ、町村の場合も地区ごとに色分けされていて、非常に分かりやすい。さらに素晴らしいのは、目指す地点へドライバーを導く目印となるものを実に細かく載せている点である。それは、信号機・ガソリンスタンド（グループ名別）・コンビニエンスストア・主要な企業名などで、特に前三者は必ず道路に沿ってあるものだから、目印として格好のものである。また、路線バスの経路と停留所名が赤で入っているのも実にありがたい。これまでの道路地図は、目的地までの距離を載せるものは多かったが、観光目的あるいは単なる通過目的の場合には便利でも、特定の地点にすばやく到達するのにはあまり意味のないものだった。まさに古本屋巡りをする人のために作られた地図帳と錯覚しそうな一冊である。私は、しばしば寄って経路を完全に覚えこんでいる店を除き、この地図のあちこちに赤で古本屋をマークし、欄外に古本屋名と住所を書き込

んで車に載せている。

《古書目録など》

古本屋の棚に欲しい本や良さそうな本を見出した時、それを買うか買わないかは、大体値段を見てから決めるものである。その決断の判断材料の一つとなるのが、古本屋が出している古書目録である。古書目録は、前に述べたように、自宅にいて古本を手に入れるために便利なものであるが、古本屋巡りに出掛ける際にも大いに役に立つ。それも大都市の国語国文専門の古書店が出しているものが良い。地方の古本屋から出ているものは、やはり情報量が少ないのである。私が古本屋巡りに持って行くのは、先にも出した東京の八木・日本・西秋・渥美・文泉の各古書店のものである。

もう一つ、古本屋巡りに是非携帯したいのが、文庫本目録である。既買の文庫本については、先に書いたように蔵書目録を作って持っていけばよいのだが、その他にどんな文庫が出ているかはわからないので、確認のためにも各種の目録をポケットに入れておくのが良い。まず文庫の老舗、岩波文庫については、幸いなことに『岩波文庫総目録』（昭六二）が出ているので、これを利用するのが便利である。私は、これの末尾にある「分野別書名索引」の日本文学（古典と近代）・日本思想の部分を縮小コピーし、昭六二年以降に出たものを書き込んだ上で持ち歩いている。次いで、新潮・角川の二大文庫の場合は、近年は新しい古典文学の文庫を全く出していないので、古い文庫目録で十分である。もっと簡単な手もある。どれか一つの文庫本の末尾にある簡易目録をコピーすれば良いのである。その他の現役文庫、あるいは既に発行を停止した文庫の場合も、それでほぼ間に合う。なお、各種の絶版文庫の内容を詳しく知りたい方には、『文庫中毒』（井狩春男、ブロンズ新社、平四）をお薦めしたい。

《手帳》

手帳の役目は二つある。一つは、既買の本の目録を手帳に作っておいて、目の前の本が買うべきものかどうかを確認することである。そうすることによって、不必要な二度本（重複購入）を防ぐことができる。前に述べたように現在私はこの方法をやめてしまったが、かつては縦一六センチ、横一一センチ程のやや大きめの、ルーズリーフ式になった手帳を使っていた。それにワープロで既買の本の書名、著者名、購入価格、購入年月日、購入書店名を打ってコピーしたものを貼り付けていたのである。蔵書数にもよるが、ルーズリーフを取り替えたり補充したりする面倒を厭わなければ、この方法も有効だと思う。

手帳のもう一つの役目は、目の前の本が、まだ買ってはいないが、古書目録などにも載っておらず、どの程度の相場価格なのか分からないような時に、一応メモをしておいて、帰ってから何らかの方法で確かめるというものである。ただ遠方の古本屋巡りでは、これを実行しても、次に来た時には既に売れてしまっていることもあり、またメモして帰ったあとに大変な掘り出し物だということが分かって、悔しい思いをすることもありうることを覚悟しておかねばならない。また、自分のためではなく、学生が欲しそうな本が安い値段であった場合、メモをしておいて帰ってから教えてあげるということも必要なのだが、大ていは時間に追われて、人のことを考えている暇はないというのが、正直なところである。

《バッグ》

一軒の古本屋で買った本は、次の古本屋まで、そこで買った本は併せてさらに次ぎの古本屋へと持ち歩かなければならない。いちいち車に戻る時間的な余裕はないのが普通である。そこで、本を持ち運ぶ入れ物が問題となる。たいていの古本屋では、ビニールの袋か紙袋に入れてくれるので、しばらくはそれで間に合うが、回る古本屋の数が多いと、両手に余ることになる。それらをまとめるのに都合のよいのが、比較的大きな紙バッグである。それでも足りない時には、背中にリュックサックを背負えばよい。昔と違って大のおとながリュックサックをしていても誰も笑わないようになったのは有り難いことである。私が車を出て、古本屋巡りに始める時には、たいてい比較的大きな紙バッグの中

に、折り畳まれた同じ位の紙バッグと、丸められたリュックサックが入っている。

《傘》

書物の保全にとっての最大の敵の一つが、水であることは言うまでもない。古本屋巡りの際にも、雨に降られるのが一番困るのである。私は、雨の日にはまず古本屋巡りには出掛けないことにしている。しかし、時には、天気予報が外れて、古本屋を回っている最中に降り出すことがある。こうなると、傘がなければ最悪、傘を持っていても、片方の手が塞がって買った本を持つのが大変になる。私は、車の中には、天気予報いかんに拘わらず常に傘を置き、曇っている時には必ずバッグの中に折り畳み傘を入れておくようにしている。晴れた空が俄に曇って雨が降り出した時は、どうしようもないので素早く安物の傘を買い込む。私には、その経験が三度ほどある。

《服装》

自分の住まいの近くの古本屋に寄る場合はともかくとして、遠方へ古本屋巡りに行く時には、当然、軽装がよろしい。特に、履物はズックに限る。古本屋が、比較的一か所に集中している所でも、全部を見て回るとなると意外に歩くものである。革靴ではズックの何倍も疲れる。ズボンはゆったりとしたもの、上着は、地図や手帳の入りやすいポケットの多くついたものがよい。

（四）古本屋地図を盲信するな

先に述べたように、古本屋巡りの際に、古本屋地図から受ける恩恵は大きいが、これに盲従していると、思わぬ失敗をすることもある。

昭六三年の夏の経験である。宮崎から熊本に移って来て、さっそく新しい古本屋地図を求めた。『全国古本屋地図』の改訂増補版（昭六二年十一月発行）である。それの九州の古本屋の部分をめくっていて、大分県日田市に古書センターが一軒あるのに気がついた。広瀬淡窓の咸宜園の近くとある。古本屋に寄るついでに見物できたらと思い、出掛けてみることにした。道順も、初めての国道二一二号線を選んだ。阿蘇外輪山を越えて、小国、杖立温泉を通るコースである。景色はなかなか良かったが、杖立温泉付近の道路は狭く、快適に走るとまでは行かなかった。日田に着いて、咸宜園はすぐ見つかったが、肝腎の古本屋が見当たらない。かなり詳細な都市地図を買って行ったにもかかわらず、該当住所には何もないのである。炎天下、汗を拭き拭き、何度も同じ所をぐるぐると回ったが、ついに見つけることができず、諦めることにした。こうなると咸宜園の見学どころではない。このまま帰るのも悔しいので、ここから久留米へ出て、何軒か覗いて行くことにした。ところが、午後熊本を出発したこともあって、久留米に着いた時には、七時を過ぎてしまっていた。開いていたのは古書センターだけで、収穫も少なかった。この時ばかりは、ガソリン代が高くついたのである。

日田の古本屋が、自分が見つけることが出来なかったのではなく、その時既に店を閉めていたのだということを知ったのは、その年の十二月、新しい『全国古本屋地図』（昭六三年改訂新版、七月発行）を手に入れた時だった。

これと同じような経験がもう一回ある。平四年の秋、友人の結婚式で初めて岡山市に行った。古本屋地図を見ると、岡山には良い古本屋がかなりありそうである。そこで、普通なら、結婚式の前後に回ることを考えるのであるが、同席する友人も多いので、一人では回れないかも知れないと思い、思い切ってその年の夏に行ってみることにした。決行したのは八月下旬のことである。車で福山まで行き、二泊して、岡山、倉敷、福山を見て回り、帰りに海岸線沿いに西下して、尾道・三原・呉・広島に寄った。この古本屋巡りは結果的に大成功と言って良かったが、ただ一軒だけ、見つけることが出来なかった店があった。それは、倉敷市の代表的な古本屋で、古本屋地図（平三年改訂新版、同年五月発行）によれば、大原美術館の近く、お堀に沿って白壁の家並みが続く観光名所の真ん中にあることになっている。ところが、やはりいくら探しても見つか

らない。行き違うのは、仲良く手をつないだ若いカップルばかりである。そのうち、俺は一体何をしているのだろうと哀しくなって、その場を離れた。その店が、数百メートル離れた所に移転していたことを知ったのは、その年の十二月、平四～五年改訂新版（平四年八月発行）を手に入れた時だった。

これらの経験は、いずれも自分では最新の古本屋地図を利用していると思ったところから起こった失敗であるが、やむを得ない失敗とも言える。『全国古本屋地図』は毎年のように改訂版が出る（その改訂の努力には満腔の敬意を表する）が、何月に出るかは分からないし、出てもすぐに古本屋の店先に並ぶとは限らないからである。したがって、今現在その古本屋が古本屋地図の住所にあるかどうかを予め知るためには、電話で直接に確認することが一番である。特に、古本屋が一軒か二軒しかない都市へ行く場合は、無駄足を踏まないためにも是非そうしたいものである。

古本屋地図に盲従すべきでないもう一つ点は、古本屋らしい古本屋でありながら、古本屋地図には掲載されていない店があるということである。古本屋地図に掲載されるのは、地元の古書組合に加入している店だけである。九州ではまともな内容の古書を扱いながら古書組合に入っていない店は、私の知る限り数軒しかないが、これらの店の存在は、クチコミか電話帳でしか知ることができない。これと関連して、『全国古本屋地図』や地方で出ている古本屋地図には、いわゆるユーズドブック屋は、ほとんど掲載されていないということも頭に入れておく必要がある。例えば、熊本市周辺の古本屋は、『全国古本屋地図』には九軒紹介されているが、地元の電話帳には、それらを含めて五〇軒近い店が載っているのである。私は、これらのユーズドブック屋から何度も掘り出し物を手に入れた経験がある（ユーズドブック屋の活用については後述する）。

したがって、古本屋を網羅的に巡るには、古本屋地図の全国版と地方版、そして電話帳（職業別）の古本屋情報を十分に利用することが大切だということになる。

（五）古本屋と懇意にならない

この見出しを見て、古本に詳しい人は、それは逆だろうと思うかもしれない。確かに、古本屋と親しくなれば、古書や古書業界の情報をいろいろと引き出すことができ、欲しい本を手に入れるチャンスも広がることがあるだろう。特に、どんなに値が張ろうと、とにかく目指す本を入手しようと考えるマニア的なコレクターにとってはそうかも知れない。しかし、この雑文の目的に沿って効率的な古本屋巡りを目指す者にとっては、古本屋と長話をするのはできるだけ避けたい事柄である。私など話下手だから、自然にそうなっているところもあるが、しょっちゅう寄る古本屋でも簡単な挨拶程度で済ませ、もっぱら書棚に向かっている。古本屋にとっても、長話をしたあげくたいした買い物をせずに出ていく客よりはいいと思っているはずである。また、古本屋と懇意になれば、早く次の店に行きたくとも、やはり何か言葉を交わさなければ失礼に思えて、ついつい時間をロスすることもあるのである。私は、前に書いたように古本屋の新規開店などの情報と、特にデパートなどで催される古書即売会の情報だけは聞くことにしているが、「こういう本を探しているのですが」などと古本屋への探書希望を口にしたことはまだ一度もない。

五、良書に巡り会うために

良書、安い本に巡り会うためには、何をおいても古本屋巡りの頻度を高めることである。古書は、いつ古本屋に入り、いつ売れるのかまったくわからない。古書の購入はまさに偶然が齎すものである。この偶然のチャンスをできるだけ確実にするためには、古本屋に頻繁に寄る以外にないのである。しかし、われわれは古本屋巡りが一日の仕事ではない。特に、地方にいる者にとっては、大都市に住む人のように、勤め帰りにちょくちょく古本屋を覗くということさえ

困難である。したがって、古本屋巡りの頻度を高めるにも限界がある。それを補う工夫が必要となってくるのである。ここでは、まず良書に巡り会うためにすべきことをあげてみようと思う。

（一）クチコミを最大限に利用せよ

良い本に巡り会うためには、まず良い古本屋の情報をできるだけ多く集めることが必要である。そのためには、どこに何という古本屋があり、どのような内容の古本屋なのかをできるだけ正確に知ることが大事となってくる。これには、既に書いたように、古本屋地図や古書情報誌、古書目録を利用することが考えられる。しかし、これらは集めようと思えば、すべての古書探索者が同じようにできることであるから、他人が知らない良い本を見つけるためには、さらに自分独自の情報を得るための努力が必要になる。その第一の方法が、古本屋が持っている情報を引き出すことである。地方の古本屋は、たいてい地元で古本屋の組合を結成しており、その上で全国組織に加盟しているのが普通である。古本屋同士の横の繋がりは、厳しい経営環境に置かれている近年、ますます強固になりつつある。これを利用しない手はない。特に、あとにも述べるように、古本屋の新規開店や店舗移転は、良い本が現れる絶好の機会である。しかし、このような場合、古本屋自身が前もって宣伝することはめったにないし、だいぶ後になって、古本屋地図や古書情報誌で見て初めて、その事実を知るということになる場合が多い。この情報は、その土地の他の古本屋が一番早く知るのである。したがって、一つの古本屋に寄るたびに、「この辺に新しい古本屋さんは出来ませんでしたか」とか、「店舗を移転したり、改築したりしたところはありませんか」などと、できるだけ尋ねてみるのが良いと思う。また、最近ではユーズドブック屋のように、古書店組合に加盟していない古本屋も多く、中にはまともな古本屋でありながら、加盟していない店もあるから、そういう情報も聞き出したいところである。

（二）新規開店、店舗改装・移転時を逃すな

古本屋が新しく開店すれば、当然古書探索者にとって初めての本が目の前に出現するわけであるから、良書が見つかることもある。しかし、現在、堅い専門書を扱う本格的な古書店が新たにオープンするということはめったにない。特に地方ではそうである。したがって、普段からその種の店の情報を気にかけておく必要はほとんどないと言ってよい。ただ、ユーズドブック本屋の開店は珍しいことではない。こういう店にも良書が出現することはありうる。特に、郊外型の大型ユーズドブック屋には、いわゆる黒っぽい本がかなり現れることがある。こういった店には、オープン後できるだけ早く寄ってみることが肝要である。これまでの私の経験では、熊本で二度、オープン当日に寄って、一度はかなりの掘り出し物を見つけることができた。幸いなことに、この手のユーズドブック屋は、開店を新聞チラシなどで予告することがあり、その時もそうだった。ただこのオープン予告は、一つの市町、広くても一県単位でしか行われないのが普通である。他県の場合、オープン当日に寄るということは難しい。そういう場合はクチコミを利用することになる。私の場合は、研究会仲間や知人が教えてくれることが多いので助かっている。例えば、福岡空港前に平七年十一月十日にオープンしたチェーン店の一つは、恐らく九州最大規模のものと思われるが、その情報は、十一月二十五日に知り、十二月八日に初めて寄ることができた。開店後一カ月というのは遅かったかも知れないが、それでも相当の掘り出し物があったのである。

次に、古本屋が店舗を改装・改築したり、別の場所に移転した時も、良書に巡り会うチャンスである。これは、堅い専門書を扱う店でも稀なことではない。店舗の改装・改築は、建物が古くなったため、あるいは単にイメージアップのためになされることもあるが、普通は古書の在庫量が増えてそれまでのスペースでは収めきれなくなった時である。そういう店では、改装にともなって、そ

れまで書庫に収まっていた本を書棚に並べることも少なくない。熊本でも平七年四月、老舗の一つが改築と拡大をして、急に本の量が増え、良書も多くなった。店舗移転の場合も同じような事情のことが多いが、時には店舗が縮小されることもある。地価の高騰で、税金や借地料の支払いが困難になることがあるからである。なお、店舗改装、移転は、ある日突然で知らなかったということは少ない。繰り返し寄っている店では、予定があればあらかじめ教えてくれることが多いからである。

（三）回転の早い店に頻繁に寄る

古本屋の中には、何度寄っても同じ本が同じ書棚の同じ位置に並べられていて、いつのまにかあの店にはこういう本があると覚えてしまうことがある。そのような本が多ければ多いほど、古書の回転が遅い店ということになるのである。古書の回転の遅い店は、古書価格が全般的に高い店、または客にとって不便な立地条件にある店であることが多い。時には、古書側には責任はなく、客の質が低すぎるということもある。ともかく、こういう店には繰り返し寄っても掘り出し物は期待できない。その逆の、寄るたびに新しい本が入っている店に頻繁に通うことが大切である。むろん、回転が早いということは自分以外の客が良書をさらって行く確率も高いということになるのだが。熊本にも、小さな構えであるにもかかわらず、専門書の回転が驚くほど早くて、いつも心をワクワクさせながら訪れるという店がある。

（四）著者ゆかりの土地の古本屋に寄る

特定の研究者の本を欲しい場合、あるいは好きな作家に関する文献を集めたい場合、地方にいるとなかなか見つからないことが多い。そういう時の一つの方法として、その研究者なり作家に縁のある地域の古本屋を訪ねてみるという手がある。特に、地元で出版された本や、研究会の会報などのパンフ的なものはその土地以外ではめったに手に入らないことが多いので、この方法は大事である。これは特に近代文学の分野では有効のようで、既に実行している人も少なくないと思う。私のいる熊本の古本屋では、徳富蘆花や徳永直、夏目漱石など郷土出身、関係作家の小説・評論をまとめて置いてある店が二軒ある。その他、九州ゆかりの作家の本も多い。私自身は、漱石に関する評論を除いて、これらの人達に関心がないのだが、好きな文学者で言うと、中野重治でこれを実行したことがある。京都で学会があった折り、中野の出身地福井まで足を延ばし、何冊か未買の関係書を手に入れることができた。中野が学んだ四高のあった金沢にも行ってみたが、地元の関心は福井ほどではないようである。しかしこれが、特定の研究者の本となると簡単ではない。著者ゆかりの地で、運よく本を見つけ、しかもそれが相当に安かったという経験は、これまで二度くらいしかない。一冊は、『国語複合動詞の研究』（関一雄、笠間書院、昭五二初版本、購入価六千円（原価七千五百円）、古書価三万八千円（八木書店、平三）、平三購入）で、下関の古書店で手に入れたもの、もう一冊は、前回の九州の古書店紹介のところでも出したが、『古方言書の追跡研究』（松田正義、明治書院、昭五三初版本、購入価四千八百円（原価八千円）、古書価一万二千円（西秋書店、平三）、平三購入）で、久留米の古本屋で見つけたものである。いずれも著者の勤務先近くの古本屋ということになる。元値が二、三千円以下という比較的安い本であれば、学生が購入することも少なくないから、もっと頻繁に見つけることができるだろう。

（五）古本屋巡りの季節について

古本屋巡りをする者にとって、古本屋巡りの季節を気にすることはまずないであろう。時間と資金さえあれば、とにかくいつでも出掛けていく。雨と雪（九州では障害となることはめったにない）の日さえ避ければ、夏の炎天下でも、木枯らしの吹く寒い日でもおかまいなしである。しかし、ここでいう季節は実

は気候についてではない。古本屋に良書が多い季節のことを指しているのである。これは誰でもわかることであるが、引っ越しの季節である。引っ越しの際に、特に遠方の場合は蔵書を処分する人も多い。したがって、特に三月の下旬に古本屋に寄ってみることは、古本屋巡りをする人にとって必須である。ただ、入荷する古書の量が多い場合は、整理に時間がかかって、店頭に並ぶのが遅れることもあるから、四月中は何度か顔を出し続ける方がよい。これまでの私の経験では、そう都合よく三月、四月に掘り出し物に出会ったことはないが、これは確実という例が一回だけある。それは、前回の古書店紹介のところでも書名を出したが、宮崎の古書店で購入した文章論に関する次のような数冊の本である。『国語表現論』（江湖山恒明、牧書店、昭三〇初版本、購入価二千円、古書価二万九千円（八木書店、平四））、『文章研究序説』（時枝誠記、山田書院、昭三五初版本、購入価一千三百円、古書価一万五千円（八木書店、平四））、『国語文体論序説』（桑門俊成、誠信書房、昭三四初版本、購入価一千二百円、古書価六千円（西秋書店、平四））。他に、既買の本まで含めると十冊近くあったように記憶する。購入日は平四年三月三十日となっている。

六、安価で古書を手に入れるために

（一）古本屋の心証を良くする

一般の新刊本書店では、定価の値引きをしてくれることは考えられないが、定価のない古本屋では、時に表示価格からさらに安くしてくれることがある。それは多く、客に接した時の印象が良かった場合である。したがって、古本屋の心証をできるだけ良くすれば、時には価格を負けてくれることがあるのである。私の経験から言えば、まず礼儀正しくすることである。これは最低限のエチケットで、レジに買いたい本を持って行った時には、無愛想に本を置かず、「これをお願いします」などと丁寧に言葉を発することである。もちろんこれだけで負けてくれる店はまずないが、悪い印象は与えない。次に、話のきっかけをつかんで、自分が遠くからわざわざこの店を選んで訪れたということを、できるだけ自然に印象づけることである。北九州や長崎の古本屋では、「熊本から来ました」と言うと、やはりそれなりの感激を与えるようだ。また、「〇〇書店さんから聞いてきました」と他の古書店の名前を出すのも、熱心な客という印象を与える点で悪くないだろう。しかし、やはり言葉だけでは不十分な場合が多い。比較的負けてくれることが多いのは、それほど高い本でなくてよいから、冊数をたくさん買うことである。レジに山のように本を置けば、古本屋に心理的マジックがかかることがある。この客はたくさん買ってくれたという感謝の念を、一冊一冊レジに打ち込んでいる間に起こさせるというわけである。他に、一冊だけ高い本を買い、それに比べて極端に安い本を数冊買うと、後者が付け足しという感じになり、負けてくれることもあるかもしれない。要は、言葉と買い物両方で、古本屋を満足させることである。

逆に、古本屋の心証を悪くさせることも書いておきたい。それは、何を措いても自ら本の値段を値切ることである。これは絶対にやってはならない。人間というものは不思議なもので、気分を害する出来事はなかなか忘れることができず、逆に良い気分になった体験はすぐ忘れてしまうという習性がある。古本屋も、値切られた経験をいつまでも覚えているかも知れないのである。それが気になると、次第に店に寄りにくくなり、良書から自ら離れていく結果になる。

また、置いてある古書の内容に、「良い本がたくさんありますね」などと、見え透いたお世辞を使うことも、古本屋の心証を悪くさせないまでも、気分をシラけさせることがあるから、やめておいた方がよいと思う。

（二）ユーズドブック屋を馬鹿にするな

近年、伝統的な古書店が次々に姿を消している一方で、文庫・コミック中心のユーズドブック屋（セコハン（＝セカンド・ハンド）本屋、リサイクルブッ

ク屋ともいう）があちこちに出来ていることは周知のことと思う。九州では、北九州地域の「古本センター（古書珍竹林）」グループ、各県の「満遊書店」グループがここ数年のうちに次々に店舗を構え、多量の古本を扱って客を呼び寄せている。これらの規模ほどでなくとも、小さなものは各県に数十店はあるだろう。私のいる熊本市にかぎっても、四十近いユーズドブック屋がある。

これらの店は、国語国文学関係の堅い専門書を探そうとする人には縁がなさそうに思われるかもしれないが、時に高度な専門書がびっくりするような安価で置いてあることがあるので、馬鹿にしない方がよい。安価での購入例は、前回も一部出したし、今回も後述の「九州の古書店・訂補」で古本センターや満遊書店などの紹介のところでも触れているので、その他の店での購入例は省略するが、中央の古書価格の十分の一以下、時には数十分の一以下で古書を手に入れられる場合があるので、ぜひこれらの店の活用を勧めたい。

また、文庫・新書も、これらの店では多量に扱っており、価格も二、三百円以下というところがほとんどであるから、絶版・品切れのものを集める絶好の場所と言ってよい。

さらに、他の従来からの古書店と違うところとして、近代文学の創作作品の初版本が比較的よく見つかることである。これらが、中央では相当な古書価になっていることは既に述べたところである。しかし、九州のユーズドブック屋では、高くても二千円以下、安ければ五百円程度でしばしば手に入る。これも狙い目の一つであろう。

ただ、これらの店は、古書を単なる金になる物としてしか扱わない傾向が顕著で、全集物をクッションを付けずに紐で堅く縛って箱が痛んでいたり、スーパーなどで使う値段シールを無造作に張り付けていてなかなか剝がせないということが少なくない。私のような内容本位で本を買う者にはそれほどでもないが、美本を求める人にとっては腹立たしく感じることもあるだろう。

（三）小型本・新書型本の中に掘り出し物あり

古本屋巡りで、掘り出し物を見つけるために是非勧めたいのが、小型本・新書型本の探索である。現在、堅い研究書の版型はB5版（週刊誌の大きさ）からA5版（教科書や総合雑誌などの大きさ）の間のものが多いが、昭和三十年代頃までは、それより一回り小さいB6版や新書型の本も多かったようである。特に、戦後の紙が貴重であったころは薄い小型本が多く出されたらしい。これらの中には、現在中央の古書価が万単位になっているものも珍しくない。しかし、地方の古書店では、その小ささ・薄さから古書価が低く抑えられているものが少なくない。そこが狙い目なのである。以下に、近代文学ばかりであるが、ここ数か月の間の買い物の例をあげてみよう。『石川淳』（井澤義雄、昭三六初版本、購入価七百円、古書価九千八百円（文泉堂書店、平七））、『國木田獨歩―比較文學的研究―』（益田道三、昭二三初版本、購入価千五百円、古書価二万円（八木書店、平五））、『国木田獨歩　佐伯時代の作品と生活』（石田靖一編、昭三五初版本、購入価五百円、古書価一万五千円（文泉堂書店、平二））、『藤村の思い出』（島崎静子、昭二五初版本、購入価四百円、古書価九千八百円（文泉堂書店、平七））、『漱石・龍之介の精神異常』（塩崎淑男、昭三二初版本、購入価千円、古書価九千八百円（文泉堂書店、平五）、『一葉の憶ひ出』（田邊夏子、昭二五初版本、購入価二千円、古書価二万八千円（文泉堂書店、平二））。

その他、年代はやや下るが、古典文学における「諸説一覧叢書」（五冊、明治書院）、古典文学・近代文学の「日本文学必携シリーズ」（八冊、學燈社）などもB6版（正確にはそれよりやや大きいいわゆる四六版）の小型本であるが、中央では一冊が万単位になっているものが少なくない。現在私の手元にあるのは、前者が一冊（『諸説一覧　奥の細道』）、後者が三冊（『万葉集必携』『源氏物語必携』『島崎藤村必携』）に過ぎないが、いずれも五百～九百円で購入したものである。さらに、新潮社から昭和三十年代に出た近代文学の「作

家研究叢書」シリーズ（B6版）も中央の古書価が高い。手元には『森鷗外研究』（中野重治編）と『太宰治研究』（亀井勝一郎編）しかないが、共に五百円で入手できたものである。

また新書版では、創元社からやはり昭和三十年代前半に出ていた「日本文学新書」シリーズもなかなかお目にかからないものである（中央の古書目録にもめったに出ない）。実際に何冊出たか判然としないが、手元にある『源氏物語（上）』（今井源衛先生）、『狂言』（荒木良雄他）『正岡子規』（國崎望久太郎）は、幸い百円～三百円で購入できたものである。

これらの小型本のうち、特に新書と同じ大きさのものは、店によっては岩波新書などと同じ棚に置かれていることもあるので、新書本コーナーを馬鹿にせず、じっくり探書した方がよいと思う。

また、古典文学の小型本は、時には学習参考書と間違われて、そのコーナーに置かれていることがありうる。特に『～の研究』などと堅苦しい題名がついていないものの場合がそうである。これも一応注意しておきたい。

（四）「不完全本」を狙う

平六年春のことである。東京の国語国文専門の古書店から送られてきた目録を眺めていた時、ふと一冊の本が目にとまった。「狂言百番　上　線装本　昭2　二、〇〇〇」とある。その時は、これがどのような素性の本なのか深くは考えず、二千円程度のものなら巷間よく見られる大蔵流の末流の本だろうが、持っていても悪くはあるまいと思い、すぐに注文の葉書を出したのだった。ところが運よく送られて来た本は、学生時代、大学の書庫に収まっているのを見かけて以来、古本屋でも一度も見た記憶のない、鷺流の森藤左衛門本を翻刻したもの（齋藤香村校訂、能樂書院）だったのである。この本の校訂は、当時の常として厳密なものではないのであるが、他に翻刻されたものはなく、十八世紀中葉の鷺流狂言の概要が分かるだけでも有り難い本と言えるのである。昭二年刊という本の古さ、そして袋綴じ和装本仕立てという本の作りもあわせて考えれば、二千円という値段は随分安い。国語国文の専門古書店がなぜこんな値段を付けたのだろうとしばらく考えて、ひょっとして古書店がこの本を上下二冊揃いのうちの一冊だと思い込んだのではないかと気がついた。一般に、複数冊で揃いの本の場合、その一部だけだと古書価格はぐんと下がるのである。しかし、この本は実は（上）だけ刊行され、（下）は未刊のままに終わった本なのである。（下）があるものとしての（上）の値段と、（下）のない一冊本では、当然大きな値段の差が出てくるはずで、古書店が一冊本であることに気づかずに値段を付けた可能性は否定できないようである。

また、『中野重治選集』（昭二二～二四、筑摩書房）は、全十巻の予定のところが六巻で中絶してしまったものであるが、第一巻から順次刊行されずに、一、五、八、九巻を残して第十巻が先に出たあと途絶したために、未だに十巻全部揃いのシリーズと思われているふしがある。例えば、これも東京の国語国文学専門の古書店の目録であるが、『中野重治選集』の欄は、全十巻と書かれ、古書価は毎年空欄となっている。幻の四冊の探索が空しく続けられているのだろうか。これも、私は六巻みな数百円で入手することができたものである。

このように、複数冊で揃いの単行本や叢書・全集の中には、途中で刊行が途絶したものが少なくない。『國語學大系』（全二十巻予定のところ十巻で途絶）のように、後に一括して復刊されたために、既刊分で全巻揃いのように思われているものは別であるが、このような物のなかには、専門の古書店でも不完全本であることを知らない場合がありそうである。そうそう頻繁に巡り会えるものでもないが、これも狙い目の一つとして頭に入れておいて悪くないだろう。

七、古書の買い時

（一）古書価のメカニズム

古書（この場合は絶版・品切れのものに限る）の価格はどのようにして付けられるのか。古書を売る側でない者にとっては興味のある問題であるが、熱意の古書業者をもたない筆者にはその辺の事情を知るよしもない。しかし、大体のことは素人でも推測することができる。

古書の値は、古書の内容的価値と初版からの経過時間、そしてその稀少性、さらには原本の姿にどれだけ近いか、の四点くらいで決まると考えて大過ないようである。

まず、古書の内容的価値であるが、当然優れた内容をもつ本の方がそうでない本よりも高価となる。しかし、内容的価値が高く、しかも初版からかなりの時間が経過して絶版になっているにもかかわらず、それほど高い値が付かない本も少なくない。筆者が好きな評論の分野に例をとれば、平野謙、中村光夫といった戦後を代表する批評家の本である。これらの人たちの本は、昭和二十年代の初版本でも、二千円以下で手に入れることが今もってそれほど困難でない。その理由は、著名な批評家の本は発行部数が多く、入手が比較的容易であること、また後年全集や著作集に収められた作品が多いこと、あるいは新書・文庫本となって再刊される場合が少なくないことなどに求めることができる。

逆に、内容的価値はさほど高くなくても、かなり高価な値がつく本もある。それは、発行部数が少なく、またあまり知られていない書店から出た本で、後に著作集や文庫に収められなかったものに多い。つまりこの場合は、その本の稀少性が古書価を決定するのである。

次に、初版からの経過年月について。一般的には古いものほど古書価が上がると思いがちであるが、必ずしもそうではない。やはり、内容的な価値や稀少性との相関によって古くても安いもの、新しくても高いものが少なくない。ただ、いわゆる明治本・大正本などといわれる古さまで行けば、内容的価値よりも骨董的価値が優って古書価が上がる傾向にはあるようだ。しかし、明治本・大正本で、現在までその学問的価値を持続させている本は少なく、あったとしてもそういう本は大体が復刻されているので、研究者が古本屋巡りで探書目標とする必要はほとんどないと言ってよい。

最後に、原本の姿にどれだけ近いかということであるが、これは特に近代文学の創作作品に当てはまる。よく知られていることなので、詳しい説明は省略するが、「完本」（箱・カバー・帯など出版当初の姿を完全に保っているもの）に近いほど古書価は高い（極端な場合、帯があるかないかで十倍の価格差が出ることもあるらしい）。「完本」も年月の経過による自然劣化の少ない本（「美本」）ほど高くなる。これに、著者の肉筆署名があれば、さらに古書価が跳ね上がるという仕組みである。

評論・研究書の場合は、創作ほどは重要視されないようであるが、やはり箱がないよりはあった方が値段が高いということはある。また、研究書の場合、よく見られるのが読者による書き込みや線引きである。これが多ければ、やはり古書価に影響するようだ。

もう一つ、古書価に差が出るものとして、学校・図書館・一般の会社などが放出した本、すなわち「廃棄本」がある。この場合ふつうはそれらの公印もしくは所蔵印が押してあるから、それとわかることが多い。「廃棄本」の扱いは、古本屋によって違うようで、そうでないものとさして変わらない値をつけるところと、ぐっと値を下げるところとがあるようだ（もともと只同然の価格で仕入れているのだから、これが当然のはずなのだが）。ただ古い価値のある本の場合は、「廃棄本」でないものとあまり変わらない値をつける古本屋が多い。研究者にとって、所蔵印など大して気にならないから、この「廃棄本」は良書を安く手に入れるための一つの狙い目となるが、そうそう頻繁に出会う本でもない。私の経験では、平六年に手に入れた『島崎藤村論〈増補決定版〉』（三好行雄、筑摩書房、昭五九初版本、購入価八百円、定価三千五百円、古書価一万二千円（文泉堂書店、平六））くらいである（後述の「古本屋巡り喜怒哀楽（六）」参照）。

（二）安いと実感する値段

古書の裏に付けられている値段を見て、「ああこれは安いなあ」と思い、一も二もなく買い入れる値段とは一体いくらぐらいか。新本の古書の場合は、大学生協などを通して定価の一割引きで手に入る。八割の値でもまだ高いと感じることが多いだろう。七割くらいになって少し安いと思う。研究書の場合は常識的に五割というのが下限であろうから、その間であれば買っても損をしたという気にはならないだろう。これが、絶版古書となると、基準となる定価が存在しないから、人によって安い高いの感覚が異なってくる。私の場合は、東京の国語国文専門古書店の価格を一応の基準としている。地方にいる私は、高くても中央の古書価格の半値くらいに付いていないと手を出さないことが多い。これは専門分野によっても事情が違ってくるが、いくらか多く集めた近代文学の評論書の値段について、中央の古書価の合計と購入価格の合計を比較してみたところ、ほぼ四分の一という結果が出た。地方ではまだこういう値段で古書が手に入るのである。なお、中央の古書価格をいちいち参照している暇のない場合は、私は大雑把であるが、一応の価格ラインを決めて購入している。国語学・言語学・古典文学の単書の場合は、特別緊急を要する古書でない限り、三千円以下、高くても五千円以内をラインとし、近代文学の場合は二千円以下のものであれば興味を持てそうな本はたいてい購入している。この値段であれば、買ったあとで、中央の古書価と比較しても、損をしたということはまずないようである。

次に、中央の古書価格がいくつかの古書目録などを見てもわからない場合について。こういう時には、例えば、古書価格がわかっている同時期の、同じ分野の本と比較してみるという手がある。しかし、著者の著名度、ページ数や出版社の違いによって価格が異なってくるから、かなり面倒な作業である。もう少し客観的な基準を考えるとなれば、一つの手として、その本の発行時の定価が現在の物価に換算してどの程度のものになるかを計算し、それを基準とするという方法がある。物価などの値段の変遷を知るための本はいろいろあるが、筆者が用いているのは、『値段史年表　明治大正昭和』（朝日新聞社、昭六三）という本である。この本の国家公務員（上級職）の給料（初任給）と比較してみよう。古書の例には、『十周年記念　哲學史學文學論文集』（九州帝國大學法文學部編、一〇七八頁、岩波書店、昭一二初版本）をとりあげる。この種の、内容がいくつかの分野にまたがる本は、中央の国語国文関係の古書目録には載りにくいものである。この本には、春日政治博士の「西大寺本金光明最勝王經の白點について」や吉町義雄博士の「九州方言通信調査概要」が収録されている。購入価は三千円（熊本県の古書店で平七年購入）で、奥付定価は五円八〇銭である。そして、昭和十二年当時の国家公務員の初任給は、七十五円となっている。つまり、この本には当時の国家公務員初任給のほぼ十三分の一の値段が付けられていることになる。これを現在と比較すれば答えが出るわけである。現在の国家公務員の初任給をおおよそ二十万円とすれば、現在の定価は、一万五千円ほどということになる。当時としてもかなり高い本であったことが知れる。そして初版よりの経過時間や稀少性も考慮すれば購入価格は相当に安かったということになろう。

（三）古書購入のタイミング

古書に限らず本の購入で一番むつかしいのは、そのタイミングである。あの時買っておけばよかった、逆にあの時買わなければよかったと一度でも思わなかった人はおそらくいないであろう。筆者もその悔しい経験を何度も味わっている。そして、あの時買っておけばよかったという後悔の方が圧倒的に多い。ここでは、筆者の経験をもとに古書購入のタイミングについて述べてみることにする。

まず、古書になる前にできるだけ買っておくべきなのは、全集物・シリーズ

物である。筆者の学生時代（昭和四十年代末から五十年代前半）、手元に置いておきたいと思う叢書・全集が次々に刊行を開始した。『岩波講座　日本語』（全十三巻、岩波書店）、『校本万葉集』（全十七巻、同）、『芥川龍之介全集』（全十二巻、同）、『志賀直哉全集』（全十六巻、同）、『新訂小林秀雄全集』（全十二巻、新潮社）、『中野重治全集』（全二十八巻、筑摩書房）、『定本小川未明童話全集』（全十六巻、講談社）、『坪田譲治全集』（全十二巻、新潮社）、『浜田廣介全集』（全十二巻、集英社）などである。このうち全巻揃えたのは『岩波講座　日本語』、『芥川龍之介全集』、『新訂小林秀雄全集』、『坪田譲治全集』だけである。特に後悔しているのが『中野重治全集』で、現在の古書価格は五十万円近くする。もともと一冊が五千円近い値段だったので当時の貧乏学生には重い負担だったのである。現在私の手元には最初の一冊だけが寂しく置いてある。買ったのは一冊が比較的安いものばかりである。買わなかったものの多くは現在一巻が万単位の古書価格になってしまっている。食事を抜いてでも買っておくべきだったと思っても後の祭りである。時期が悪かったとしか言いようがない。これらのうちいくつかは、昭和五十年代後半に再刊されたが、その時は、今度は所帯持ちの貧乏研究者になっていて、また買い時を逃してしまった。ともかく、全集物・シリーズ物は、完結後一度に購入するのが容易でない場合が多い。現在刊行中の岩波新日本古典文学大系なども、国語国文学専攻の学科に入ったばかりの学生にとって、あとになって揃えるのは大変だろうと同情せざるをえない。

ただ、全集物・シリーズ物でも、後に古書価が下落するものがないわけではない。例えば、ほるぷから出ていた『名著復刻児童文学館』第一期・第二期揃六十五巻がそうである。学生時代、定価十七万円で新本で出ていたころ、福岡市の古書市に七万六千円の値で出品されたことがある。貧乏学生にはそれでも大変な値段であったが、二十回払いが可能だったので、思い切って購入したが、その後古書価は下がり、現在地方では高くても五、六万円、安い場合は二、三万円で手に入るようである。児童文学関係のシリーズ物はしばらく買い控えして、値が下がるのを待った方がよい時も少なくない。

次に、見つけ次第買っておいて損にならない場合として、その本が既に絶版・品切れになっているもので、しかも、古書価が原価（定価）より低く付けられているものである。私が古本屋巡りをしていて、最も醍醐味を感じるのが、これらの本を見つけた時である。中央の大都市の古書店や地方の老舗ではほとんど期待できないことであるが、地方の中小古書店ではまだしばしば見つけることができる。こういう本は、たとえ再版されても、原価より安くなることはまず考えられない。特に、人件費・紙価等の高騰が続いている現在、原価より相当に高くなるのが普通である。ただし、原価より安く付けられる可能性のある本は、出版年代が限られてくる。古くても、昭和四十年代後半以降の本である。それ以前は、研究書でも数百円という定価が珍しくなかったが、現在それ以下の値をつける古本屋はまずいない。

第三に、少々値が張っても早めに購入しておいた方がいい本として、一度品切れになったら再刊される可能性の低い本があげられる。その筆頭にくるのが、だれそれ教授・先生の還暦記念・退官記念・古稀記念などと銘打った論文集である。これは複数の研究者の論文が掲載されているので、再刊の計画があってもいちいち承諾を得ねばならず、もし中に物故者がいれば著作権継承問題がからんできて、手続きがますます面倒になる。私の知る限り、一度品切れになったこの種の論文集が再刊されたということはないようである。次に、著者・出版社の知名度も再刊の可能性を左右すると言ってよいだろう。特に、あまり知られていない出版社から出た本は、品切れ即絶版ということになりかねない。国語学で言うと、それぞれの地方で出版された方言集が特にそうである。そういう場合は、古書価格も相当に高くなるようである。また、需要と供給の兼ね合いが再刊されるかどうかの決めてになることもある。堅い研究書で、その分野の研究者人口が少ない場合、つまりその本の需要が高くない場合は、再刊の可

能性が低くなる。出版社も営利が目的だからである。出版されて十年、二十年たっても品切れにならない本は、その可能性があるから、自分の研究に関係がある場合は早目に買っておく方がよい。その他、製本上の問題も再刊・非再刊に関係するかもしれない。例えば、相当に分厚い本とか、写真や図表が特別多い本は再刊されにくいという可能性はありそうだ。

次に、古書の買い控えの必要性について。あの時に古書を買わずにおいてよかったと思うことは、私の経験では稀れであるが、全く無いというわけでもない。その代表格が、九州方言学会編『九州方言の基礎的研究』（風間書房）である。この本は、九州の方言に興味を持つ者が必ず参照しなければならない基本図書であるが、昭四四年に初版が出て以来、一度も再刊されることがないまま品切れとなり、時折り中央の古書店の目録に出ても、十万円以上の値段がつくようになっていた。その本が、福岡のある古書店の目録に六万五千円で出ているのを見つけた時、随分と迷ったのである。恐らく再刊される可能性はほとんどないだろう、しかし、六万五千円でもやはり高い。二回の分割払を頼み込んで手にいれておこうか——。結局、申し込まずにいるうちに、次の目録が来たが、そこにはもうその本の名前は無かった。誰が買ったのだろう、ひょっとしたら自分もよく知っている研究者かもしれない、しかし、あの値段だから中央の古書店がさらって行った可能性もある。そんなことを考えていたが、それから二年も経たないうちに、突如二万五千円（税抜）で再刊されたのである。しかも、若干ではあるが改訂が施されていた。実は、この改訂版は、筆者も参加している九州方言研究会のメンバーが、旧版の編者のお一人に懇請して実現したものである。旧版が一万一千五百円であったから随分と割安なものとなった。そして、筆者は改訂版の関係者として、二割引で手に入れることが出来たのである。

こういうケースは稀れであろうが、やはり高額の古書で、ある程度の需要が常に見込まれると考えられるものは、買い控えることも必要である。最近の例では、やはり十万円以上の古書価格がついていたのが、三万円弱で再刊された『品詞別日本文法講座』（十巻、明治書院）などがある。現在、私が鶴首して復刊を待っているのは、これも明治書院の『敬語講座』（全十巻、原価各千五百円、古書価合十二万円（八木書店、平七））と『講座日本児童文学』（全十巻、原価各千八百円、古書価合十五万円（八木書店、平七））である。両方とも学生時代に、その半分ほどは集めたのだが、その後古書店にもなかなか現れなくなってしまったものである。

なお、古書を購入すべきか、買い控えをするか、どちらとも簡単には決断が下せない場合もある。例えば、ある作家の全集が、その中の一巻か二巻が欠けて置いてある場合である。この場合、全巻揃いの古書価格より相当に値が下がるのが普通である。しかし、その値に釣られて購入するのは考え物である。その後に欠巻を埋めることができるという保証はどこにもないからである。特に、その全集が自分の研究に必須のものの場合は、やはり高くても全巻揃いのものを購入すべきであろう。しかし趣味の本の場合は、気長に欠巻を探すのも古本屋巡りの楽しみの一つになるかもしれない。私も今、欠巻一冊に巡り会うのを待っている全集がある。先に出した『定本小川未明童話全集』（全十六巻、講談社、原価各二千七百円）である。その巻四のみ欠となっているものを、平七年に熊本県内のある古本屋で見つけた時、やはりかなり迷ったのである。しかし、十五巻で一万二千円（一冊八百円の勘定）と付いていたので、その安さ（全巻揃いの古書価は例えば十七万円（文泉堂書店、平七））に負けて購入してしまったのである。今後巻四に出会えるかどうかは神のみぞ知るであるが、他の巻で小川未明の童話の大部分を読めることを考えれば、後悔するほどのことはないと思っている。

八、いわゆる二度本について

ここで「二度本」というのは、同じ本を二度、三度と買う（買ってしまう）場合に用いる言葉である。ただし、この場合の同じ本とは、内容・形態（装幀など）が同一のものを指す。同一内容のものでも、単行本とその文庫版、あるいは出版社の変更による異版などの場合は除く。

この言葉が一般に通用する言い方であるかどうかは知らないが、この経験は、誰にでもあるだろう。特に、蔵書の数が増えるにつれて二度買い、三度買いをしてしまう可能性は高くなる。

二度本には、無意識のうちに買ってしまう場合と、意識的に買う場合とがある。無意識の二度本は、言うまでもなく、前にその本を買ったことを忘れてしまった時に起きる。比較的安価な一般向けの本や、新書・文庫の場合が多い。比較的高価な専門書は、だいたい買った記憶があるので、二度本の危険性は少ないと言えるが、蔵書の数が増えるにつれ、記憶はあいまいになるので、時には思わぬ失敗をすることもある。特に、紛らわしい書名の本が何冊か出ている場合は要注意である。『国語学概説』の類は恐らく両指に余るだろうし、例えば『中世語論考』と『中世語論攷』という本が出ている時などがそうである。書名が似ているために、既に持っている本を未買の本と覚え違いして買うことがありうる。また逆に、未買の本を既に買っていると覚え違いして買わなかったために、みすみす安価な良本を見逃すことも起こるのである。これらを防ぐ最善の方法は、前にも書いたように、コンパクトな蔵書目録を常に持ち歩くことである。

ついでに言えば、私の経験では、前に買った本かどうか迷う時は、大体においてやはり買っている場合が多いようである。しかし、そうでないこともあるので、対象が安価な本、特に新書・文庫の場合は、再び買っておくことも多い。

次に、意識的な二度本とは、既に買っているとわかっていながら、再び、稀れには三たびと同じ本を買うことである。内容本位の研究者にとって、同じ本を二冊以上持つ理由はなく、書籍代の無駄遣いと言われれば確かにそうなのだが、この意識的な二度本には、本好きの別の一面が覗く。それは、一つには、古書をできるだけ初原の姿に近い形で所有したいという欲求から出ている。すなわち、再版以降のものを持っている時には初版本を、箱入りでない本を持っている時には箱入りの本を、書き込みのしてある本を持っている時には書き込みのない本を、痛みが出ている本を持っている時には痛みのない本を、といった具合である。専門書の場合は、初版であるか否かという問題は、ほとんど意味がないが、繰り返しの読書に耐えるためには、痛みのない箱入りの本であるに越したことはない。また、例えば近代文学の本になると、初版か否かが古書価格に大きく影響することもあるから、初版本が安価で見つかると意識的な二度本になることもある。

意識的な二度本の二つめのケースは、最初に買った時の値段よりも相当に安い値段、あるいはそう感じられる値段が付いている本に出会った時である。古書は時の経過とともに価格が上がって行くのが普通であるから、十年以上も後に、最初に買った時の値段と同じ位か、それより安い値が付いていると、どうしても手を延ばしてみたくなるのである。具体的な例をいくつか挙げてみよう。服部四郎『言語学の方法』（岩波書店）は、国語学研究者にとっても必読の基本図書であり、繰り返し再版されているので、手に入れることはそれほど難しくないが、それでも品切れになってかなり時間が経っている（平七年現在の神田古書価格は一万八千円前後）。私は、この本を学生時代（昭五一年）、定価三千五百円の時代に大学生協価格（一割引）で購入していた。それを、平四年になって、熊本のあるユーズドブック屋で、二千円（定価は四千円と表示）で他の一般書の中に見つけた時、躊躇せず買い入れたのだった。この時の私の心情は、中央の古書店はおろか、地元の学生すら寄りそうにないユーズドブック屋だから、ここで私が買ってあげなければ、この最高級の専門書が可哀想、そして服部四郎東大名誉教授には申し訳ないというものであった。また、日本方言學會編『日本語のアクセント』（中央公論社、昭和十七年）は、恐らく再版

される可能性のほとんどない本だと考えられるが、内容の素晴らしさから研究者にとってはどうしても手元に置いておきたい本である。私は、この本を、昭五三年に福岡のあるデパートで催された古書市で、三千五百円で手に入れていた（当時の古書価格は分からないが、昭五七年の神田のある代表的な国語国文専門の古書店の目録には二万円と付いていた）。この本に再び巡り会ったのは、平三年、福岡香椎の古書店においてである。値段は三千円（当時の神田古書価格は昭五七年当時とほぼ同じ）。その価格の安さと、前の本が、箱が痛み、綴じ糸が切れかかっていたこともあり、一も二もなく金を出したのであった。

九、古書の整理

ここで古書の整理というのは、買って来た古書自体をどう整理し、使いやすい形で保存するか、などということを言おうとしているのではなく、古書一冊一冊が持っている情報を整理することを意味する。

蔵書自体の整理については、万巻の指南書が出ており、私など喙を挟む資格もないが、結局多くの人が言う「蔵書の整理の極意は、それが不可能だと悟得するにあり」というところで落ち着きそうである。現在私は、自宅の八畳足らずの書斎とリビングの一部、四畳半の物置同然となってしまった部屋の一部と、大学の研究室に本を置いているが、その整理についてはほとんどお手上げの状態である。実家や貸倉庫にも分散して保存するという人もあるようだが、すべての蔵書を目の届く範囲に置かねば気がすまない性格なのでそれはやっていない。三年程前現在の住居に移って来た時には、試みに八畳足らずの自室に、詰め込めるだけの本を置いてみたことがある。六段のスチール製書棚を迷路状に並べ、天井板の上にも本を並べ、文庫・新書本など幅の狭い本はそうでない本の前に二列に並べて置いた。スチール書棚は二十一個入ったのでびっくりしたが、通路がひどく狭く、お世辞にも快適な書斎とは言えないものだった。そんなところへ、阪神大震災が起こり、心配した妻子の懇願を受け入れて、三分の一ほどは研究室に運んだ。しかし、研究室も公費で買った本や雑誌、資料で余裕がなく、結局雑然とした倉庫状態である。

そういうわけで、蔵書自体の整理については、お手本となることは何も言えないのであるが、古書一冊一冊が持っている情報を整理することは、学生時代から実行しているので参考になればと思う。

まず、買った本は基本的にすべて、裏の見開きに、購入価格と購入年月日、購入書店名を鉛筆で書き入れている。見開きが濃い色の紙の場合は、印刷面の最後のページに書き込む。購入価格は、古書の場合は店が付けた価格が書き込んであることが普通なので、その時はそのままにしているが、ユーズドブック屋などでは価格を表示しないことも多いので、忘れないうちにできるだけ素早く書き込む。価格表示のない本を一度に多数購入する時には、レジでいちいち価格を書き込んでもらうか、鉛筆を借りて自分で書き込む。老舗の古書店では、自店の蔵書票を貼付しておいて、そのうちの書名や価格を書き込んだ部分を切り取って渡すことがあるから、この場合もあとで自分で価格を書き込まなければならない。ただ、新刊本の場合は、購入書店さえ書いておけば値段が自動的に分かる（普通の本屋では定価通り、大学生協では一割引き）ので、書き入れないのが普通である。次に、購入年月日と購入書店名は、例えば「1996・1・10　北九州・珍竹林」などと本の下の端に簡単に書き込む（横書き）。支店がある場合にはその支店名まで入れる。これらの書き込みをするのは、単純にあとあとのために便利だからという理由による。本ごとに古書目録の価格と比較したり、購入書店ごとに価格の傾向を調べたりする時がそうである。また、購入年月日を入れておけば、購入当時の古書価格との比較が容易になる。時には、それによって購入時のさまざまな記憶を呼び起こすこともできるのである。書き入れに鉛筆を用いるのは、本に余計な傷を付けないことが第一の理由であるが、将来万が一その本を手放さなければならなくなる時が来た際に、

鉛筆だと余計な情報を残さないようにできるからである。特に私のような、安価での購入にこだわった者にとっては、表示価格がない方が都合がよいのである。本の手放しは、恐らく自分が生きている間はほとんどやらないと思うが、今はの際には、遺言の一つとして値段消しを妻子に命じているかもしれない。

次に、買ってきた本は、学生時代から二十代末までは、市販の金銭出納帳に購入年月日、書名、出版社名、古本か新本かの別、購入金額を書き込んでいた。ワープロを使うようになってからは、「図書購入記録」と銘打って、その日のうちに購入年月日、購入書店名、書名、著編者名、出版社名、そして購入価格を打ち込んでフロッピーに保存している。例を下段に挙げておこう。この他にも、購入書の判型、ページ数、初版本か否か、箱やカバーの有無なども打ち込みたいのだが、一回の購入冊数が相当に多くなった現在、かなり面倒な作業であり、一行四〇字のワープロの画面にも収まり切れないので、そこまではやっていない。購入価格は、一店ごとに小計を出し、ひと月ごとに中計としてまとめている（同時に合計冊数も入れる）。そして、ある程度打ち込んだところで印字し、ファイルに綴じている。また、別に月ごとの購入冊数と合計金額も、「図書購入金額記録」としてフロッピーに入れ、毎月の購入状況や一年の購入状況を一覧できるようにしている。その他、著者別、出版社別、購入書店別、分野別などに分けて、購入図書を分類したり、グラフ化したりしたこともあるが、今では本の多さから面倒になってやめてしまった。パソコンを使うともっと自由にさまざまな整理ができると思うのだが、一社のワープロを十年以上使い続けている（現在のワープロは四台目である）と、キーボードを打つ指の動きが完全に固定してしまい、パソコンがいかにも使い勝手の悪いものに感じられるのである。

このような「図書購入記録」「図書購入金額記録」を金銭出納帳やフロッピーに作っておくと、やはりあとあとの整理に便利であるし、自分の図書購入の歴史を辿ることもできる。「院生の頃は奨学金が貰えたし、高校で非常勤もし

96・1・10　北九州小倉そごう古書市

『洋学資料と近代日本語の研究』	松村明	東京堂出版	3500円
『近代作家論叢』	片岡良一	思索社	1500円
『鷗外と漱石　明治のエートス』	金鶏叢書5　三好行雄	力富書房	2000円
		小計	7000円

96・1・10　北九州若松ぶっくらんどピース古本

『ことばの世界　Ⅱことばのはたらき』	マリオ・ペイ	講談社	100円
『不思議の部屋・1　ことば遊び百科』	桑原茂夫	筑摩書房	200円
『川端康成文芸の世界』	小澤正明	桜楓社	200円
		小計	500円

96・1・10　北九州今井古本

『資料総集　三島由紀夫』	福島鑄郎	新人物往来社	1500円

96・1・10　北九州黒崎珍竹林古本

『中世国語における文語の研究』	山口明穂	明治書院	3000円
『口語法精説』	湯沢幸吉郎	明治書院	2500円
『言語表現の構造』	林四郎	明治書院	4000円
『文学と詩精神』	村松剛	南北社	500円
『文学の虚構と実存』　至文堂選書	長谷川泉	至文堂	600円
『風立ちぬノート　立原道造と堀辰雄』	大城信栄	思潮社	500円
		小計	11100円

96・1・10　北九州黒崎珍竹林古本引野店

『中野重治選集』	中野重治	河出書房	500円
『文学の否定性』	森川達也	審美社	1200円
『大衆文芸評判記』	三田村鳶魚	桃源社	1500円
『数学の世界』	森毅・竹内啓	中公新書	150円
		小計	3350円

ていたので、随分本を買ったものだな」とか「この時期は女房の失業保険まで食い潰してやり繰りしていたので、本が買えなかったわけだ」とか、「『大漢和』や『日国大』や全集物の支払いに追われて、まともな研究書が買えなかった頃だ」とか、「専門の本はそっちのけで近代文学・児童文学ばかり買っていた時期だ」とか、さまざまな思い出が浮かんでくるのである。

十、古書の余得

古本屋巡りの醍醐味は、何を措いても良書を安価で手に入れることにあるが、時には思わぬお土産付きの古書に出会うことがある。これもまた、古本屋巡りの楽しみの一つである。

亀井孝『概説文語文法』（吉川弘文館、昭三〇）は、著作集にも収められていないので、一般にはあまり知られていない本であるが、著者一流の考えに貫かれた特色ある本である。現在はもちろん絶版となっているが、中央の古書価も内容に比してそれほど高くないので、入手は可能である。私は、この本を学生時代（昭五二）に佐世保の古本屋で手に入れた（購入価三百円）のであるが、そこにはかなりの書き込みがしてあった。一般に概説書の書き込みと言えば、まず筆にも棒にもかからない内容のものと考えて間違いない。時には、概説書の説明に一々反駁を加えた内容の書き込みがあったりして、それなら最初から使わなければよいのにと苦笑させられることもあるぐらいである（だから使うのだと言う人もいるかもしれない）。しかし、この本は違った。書き込みの末尾に「亀井」の文字が記されている部分が二か所あるのである。亀井氏が書いた著書に、亀井氏自身の名前が書き込まれているということは、氏の講義を直接受けた人が、氏の注釈や補足を書き込んだものにほかならないということになる。ということは、他のすべての書き込みも亀井氏の口から出た言葉を写し取ったものなのだ。折角であるから、その一つを紹介しよう。八七頁から八八頁にかけての奈良時代の文法の説明のところに、おなじみの「ク語法」が取り上げられている。その書き込みに、いわゆる「アク」説が紹介され、それに対するコメント（〈批判〉と明記されている）が次のように書かれている。〈「アク」が「こと」という意を持っていたとしたら、それは文法現象として妥当であるが、奈良時代にはその例なし、故にこの説は文法現象に語源的説明を加えたもので、語源を以て文法を説明することになり、一つの（「アク」があったろうという）仮説の上に立った文法理論で、文法の説明としては許されない。国語史と構造論との混同也〉。その他、〈音便、音便形　概念を異にす〉とか、〈金の言い分け　○かなだらい（金属）○かねもち（金銭）〉とか、簡潔に書かれたところも多く、ことごとく示唆的である。後者は、言われて初めて気がつき、教壇に立つようになった後、いわゆる「被覆形」と「露出形」の歴史的変遷に触れる時には必ず引き合いに出すようにしている（ヒョウセツをお許しください）。亀井氏は最近亡くなられ、ついにその謦咳に接することは叶わなかったが、この本を読み返すたびに、氏の肉声が聞こえるような気がして、幸福な気分に浸れるのである。この本を古本屋に売った人については何の手掛かりもないが、一橋で亀井氏の授業を受けて、郷里の佐世保に帰り実業の世界に入った人でもあろうか、とにかく心から感謝の意を捧げたいと思う。

もう一つ、古書の余得を書いておきたい。これは、国語国文学には直接関係のない趣味の本に関してなのだが、片田舎に生まれ育ったせいか、四季折々の景物を題材とした童謡や唱歌が無上に好きで、出勤途中もカーステレオをがんがん鳴らして、歌いながら聞いている（はた目にはちょっと不気味な光景かも知れない）。古本屋巡りにおいても、それらに関する本が安くであれば、たいてい買っているのだが、特に明治・大正・昭和戦前の尋常小学校・国民学校で教科書として用いられた唱歌の本は、なかなか見つからず、あっても他の教科書に比べて格段に高い値がつくのが普通である。それが、たまたま平六年に宗像の古本センターで一冊見つけることができた。『初等科音樂　二』（文部省、

初版は昭一七）という教科書である。購入価は五百円。しかし、この教科書の価値は、値段の安さばかりではなかった。これが、いわゆる「墨塗り教科書」だったのである。戦後の教育の混乱期を象徴する「墨塗り教科書」の実物を見たのはこれが初めてである。これも折角だから、どこが墨で消されているか紹介しよう。まず目次（「もくろく」と書かれている）には、頭に「君が代」「勅語奉答」「天長節」「明治節」「一月一日」「紀元節」のいわゆる式日唱歌が置かれ、次に漢数字で一から二十まで番号が打たれ、「春の海」「作業の歌」「若葉」「機械」「千早城」「野口英世」「水泳の歌」「山田長政」「青い空」「船は帆船」「靖國神社」「村の鍛冶屋」「ひよどり越」「入営」「グライダー」「きたへる足」「かぞへ歌」「廣瀬中佐」「少年戦車兵」「無言のがいせん」が書かれてあったのが、そのうち「機械」「千早城」「山田長政」「船は帆船」「靖國神社」「入営」「グライダー」「廣瀬中佐」「少年戦車兵」「無言のがいせん」の十曲が墨で消されている。そして、五線譜付きの本文では、これら十曲の歌詞のある箇所は本から切り取られ、その跡はのり付けされてしまっているのである。さらに、歌詞全体は削除されなかった「若葉」（これは私の最も好きな曲の一つである）にも三箇所墨塗りの部分がある。それは歌詞の中の〈鳥居〉という言葉が二箇所（本文と五線譜の下に書かれた部分）、そして挿絵の中にある〈鳥居〉そのものの絵である。私はよく、授業で古本の話をするのだが、この時もさっそく取り上げ、実物を回覧させながら、「この墨塗り教科書の意味するところを考えなさい」という課題を出した。国語学の授業で唐突な質問をされた学生は戸惑ったようだが、戦後の一時期を擬似体験するという、なかなか得難い経験ではあったと思う。

十一、古本屋巡り喜怒哀楽

（一）服装で値段を付けられる（平二年四月）

南熊本駅近くのユーズドブック屋に寄る。いつものように多量の雑本と文庫本の間に視線を走らせていた時、ふとある古ぼけた単行本に目が止まった。書名は『青龍集』。春日政治博士の随筆集である。この本は、博士の著作集に収められているので、今でも簡単に見ることができるが、それを買うとなると一万円を出さなければならない。今見つけた本は、岩波から昭和十四年に出た初版本である（箱はなかった）。私の目の色は当然変わったが、惜しむらくは値段がどこにも付いていない。ユーズドブック屋だから、まあ安く売ってくれるだろうと、カウンターに持って行ったところ、係の若い男は、私の姿をしばらく眺めた上で、本をためつすがめつ見ていたが、主人がいないので値段が付けられないと言った。雑本や文庫本は定価の半額かそれ以下で売るのがユーズドブック屋の常であるが、さすがにこの本には困ったのだろう。なぜなら、昭和十四年のこの本の定価は二円だったからである。まさか、それを一円では売られまい（それよりむしろ、この若い店員は定価を読めなかった可能性が高い。定価表示が「貳円」とあったから）。私は諦めて、元の本棚に返した。それから十日ほど経ってまた寄ってみたところ、今度はちゃんと価格が書いてあった。二千円である。それでも、著作集を買うよりははるかに安かったが、私はとうとう買わなかった。どうも私の姿格好を見て、値段を付けたのではないかという気がしてきたからである。初めに寄った時、私は授業の帰りで、スーツにネクタイという格好だった。教師らしい人間が、何か高等な専門書を見つけ出して来た（実際そう言っていいのだが）と思われてもしかたがない気がしたのである。それにしても癪にさわって、しばらく忘れることができなかった。それから二年ほど経って、東京の本郷のある古本屋で、箱入りの初版本を七百円で手に入れることによって、ようやく溜飲を下げたのであった。

（二）憧れの神田・本郷・早稲田（平四年五月）

国語学会が筑波大学であった折に、東京の古本屋を回る。

地方に住む者にとって、東京の古本屋に対しては特別の感情がある。古本屋に対してというより東京の古本屋を日常的に利用できる人たちに対してというのが正確だが、それは羨ましさとその裏返しとしての対抗意識、むしろ反感である。古書が比較的自由に手に入る東京など大都市にいる人が書いた古書に関する本の中には、しばしば「古本漁り」という言葉が出てくるが、地方にいる者にとってこれほど癪にさわる言葉はないのである。漁るほどの本がない地方の者が、中央の人たちを見返すには、神田や早稲田の古書価格よりはるかに安い値段で本を手にいれることによって、しばしの優越感に浸るよりないのである（哀しいかな！）。

しかし、東京の古本屋に対する反感は、自ら出向いた時ばかりは都合よく薄くなる。その時は比較的蓄えがあったので、できるだけたくさんの古書を、可能な限り安く買おうと思い、熊本を出発する前に、かなり大きなキャスター付きのボストンバッグを買っておいた。キャスターが付いていると相当な本の量でも楽に移動できると考えたのである。ボストンバッグは、東京駅地下の階段近くのコインロッカーに入れておき、水道橋の近くに宿を取って、学会の合間を縫いながら、三日かけて神田、本郷、早稲田と三大古本屋街を、一通り見て回った。足は、いつも地下鉄である。古書を持ち歩くのには大きめの紙バッグを使い、それが一杯になると、地下鉄の駅に戻ってコインロッカーに入れ、再び古本屋を回る。一軒の古本屋でかなり多量の本を買うこともしばしばであるが、それも必ず自分で持って歩く。古本屋に頼んで宅急便で送って貰えばもちろん楽なのだが、そういうことは絶対にやらない。良い古書をたくさん買ったという実感を全身で確かめることに何よりの喜びを感じるからである。かくして、寝台特急に乗るために東京駅に戻った時には、古書の紙包みが山のようになっていた。それらをボストンバッグに移し替えてみると、何とか全部収まる。ところが、あまりの重さで階段がなかなか上れない。ここではキャスターが何の役にも立たないことに迂闊にもその時に初めて気がついたのである。一段一段、休み休み上って、一階にたどり着くが、ここからホームまでが、また長い階段である。息を切らして一段ずつ上っている自分を、人々が不思議そうに横目で見て行く。何とか列車内に持ち込んだ時には、すっかり疲れ切っていた。在来線のホームには、古本屋巡りをする人のためにも、是非あちこちにエスカレーターを設置してもらいたいと思う。熊本に帰って、本を数えたところ、九十一冊あった。中に雑誌や文庫本が混じっていなかったなら、東京駅で立往生していたところである。

（三）古本屋巡りはペイするか（平五年一月）

例えば、遠方の古本屋へ出掛け、一万円が相場価格の古書を五千円で手に入れたとして、交通費その他の経費が五千円以上かかった場合、この古本屋遠征は、成功したと言えるだろうか。ちょっと足を伸ばせば古本屋にぶつかる大都市と違って、地方都市の古本屋巡りには、いつもこの問題が付きまとうのである。ある人は、「馬鹿馬鹿しいことだ。神田の古本屋から送ってもらった方が、楽でよい。古本屋に出掛ける時間があったら、机に向かって勉強しろ」と言うかも知れない。また、ある人は、「それは成功である。遠征にかかった費用などすぐ忘れてしまう。後々まで残るのは、相場価格の半値で古書を手に入れたという満足感である」と言うかも知れない。

それぞれ尤もな意見であるが、私が後者に与するのは言うまでもない。しかし、そういう私も、古本屋巡りにかかる諸費用を無視しているわけではない。それらを出来るだけ低く抑える工夫を抜かりなくやっているつもりである。そのことについては、既に述べたところだが、ここでは、古本屋巡りの最もリスクの大きい例を一つ紹介して、それでもなお古本屋巡りが十分にペイするものであることを力説したいと思う。

平五年の一月半ば、私は島原市のある古本屋を目指して車を走らせていた。前年末に、大村市の奎書店という古本屋から教えてもらった店で、名を吉四六

書房という（前回「九州の古書店」参照）。『全国古本屋地図』には載っていない店である。島原には他にまともな古本屋はない。たった一軒の古本屋のために、有明海を渡って行くのであるから、当然大きなリスクがある。その日は平日であったが、閉まっている可能性がまずある。また、私の欲求を満たしてくれるような本があるかどうかも当然分からない。普通なら、別の目的を兼ねて行くところである。島原と言えば松平文庫であるが、ふた月程前、狂言の写本を見せてもらったばかりであった。奎書店の主人の、良い本が安くであります、という月並みの言葉だけが頼りである。

結果は、しかし大収穫と言ってもよいものだった。買った古書は、次の十四冊である（価格は、購入価と表示定価を示す）。

『国語学概説』（春日正三他、双文社出版、七百円、千八百円）
『図解外来語辞典』（吉沢典男、角川書店、千五百円、二千八百円）
『言語學原論（改譯新版）』（ソシュール、岩波書店、五百円、四百八十円）
『一般言語学入門』（コセリウ、三修社、八百円、二千三百円）
『言語学とは何か』（エルジン、研究社、四百円、二千百円）
『教養としての言語学』（島岡茂、白水社、四百五十円、千三百円）
『言語学のすすめ』（田中春美他、大修館書店、八百円、千八百円）
『比較言語学教材』（寺川喜四男、杉山書店、八百円、千百円）
『英語変遷史』（スミス、千城、六百円、千円）
『狂言三百番集　上』（野々村戒三他校註、冨山房、五百円、九十銭）
『文學の思考』（窪川鶴次郎、河出書房、千二百円、二円五十銭）
『高橋和巳論』（真継伸彦、大和書房、七百円、千三百円）
『暗黒への出発』（高橋和巳、徳間書店、三百五十円、五百八十円）
『精神のリレー　講演集』（埴谷雄高他、河出書房新社、四百円、八百八十円）

買価総額は九千七百円。しかし、これを八千七百円に負けてもらった。奎書店の紹介であること、熊本から来たことなどを話して、心証を良くしたこともあるであろう。これに対して、表示定価の総額は、一万七千四百四十三円四十銭。しかし、この数字に大した意味がないことは言うまでもない。それらの中には、現在品切れのものや絶版のものが、おそらく半数近くは含まれていると考えられ、中央の大都市の古本屋で求め得たとしても、合わせれば二万円を超えることは確実、ひょっとすれば三万円近くになるかもしれないからである。

これに対して、必要経費は次のようである。

ガソリン代　一一〇〇円程
フェリー代往復　四四〇〇円
駐車料金　三一〇円
地図代　六二〇円
缶コーヒー二缶　二二〇円
タバコ代　二二〇円

合わせて六千八百七十円程。フェリーを使わずに有明海沿岸を回っておれば、はるかに安く済んだであろうが、これでも、金銭面でこの古本屋遠征が成功したことは間違いないであろう。

内容的にはどうか。専門の国語学関連図書という点では、実は本当に欲しいという本は含まれていないのであるが、持っていても何らかの形で役に立つものばかりである。この中で、『狂言三百番集　上』だけは、いわゆる二度本（重複購入）であるが、上下揃いの神田古書価格は、優に一万円を超すので、安い買い物である。

しかし、何よりも、この古本屋遠征の最大の収穫は、最後の『精神のリレー講演集』に出会ったことである。この本は、昭四六年に没した高橋和巳を偲ぶ講演会がきっかけとなって、毎年全国各地で催された現代と文学、政治を考える講演会の、主要な講演のテープを起こしたものである。その中に、昭五〇年五月に九州大学文系キャンパスの一教室で催された講演会の分が入っているのだが、実はその講演会の会場に私も居合わせていたのである。この本の頁を

めくりながら、私の脳裡に十八年前の情景が鮮やかに蘇ってきた。

当時の私は、代々木系の学生からも反代々木系の学生からも、頭数（あたまかず）要員として信頼されており、何かの集会の時には必ずどちらかからお誘いがかかったが、参加した集会の内容に感動するということはほとんどなかった。しかし、この講演会を主催した演劇戦線その他のグループの実行力には感服せざるを得なかったのである。私は、会場の後ろの方で、島尾敏雄、井上光晴、真継伸彦の三人の講師の話を聞いた。内容はすっかり忘れてしまったが、島尾敏雄の黒々とした髪、彫りの深い相貌の印象が強烈だった。

私はこの講演が本になっていることを今までまったく知らなかった。もしこの本に出会わなければ、講演会のことは記憶の片隅に埋もれてしまっていたろうと思う。

このように、古本屋巡りには、どんな本に巡り会うか分からない楽しみがあるのである。思いがけず良い本に出会った時の喜びは、他には代えがたいものがある。たった一軒の古本屋でも、このように金銭的にも精神的にもペイすることが稀れでない。まして況や、比較的多くの店が集まった都市の古本屋巡りにおいてをや、である。

（四）古本屋巡りは万病の元？（平五年二月）

大学教師にとって、一月から三月までの間は、卒論読みやら入試やら定期試験やら人事のことやらで、目が回るような忙しさである。当然ストレスがたまる。その解消法は人それぞれであろうが、私にとっては、当然古本屋巡りということになる。

その日は、午前中で仕事にひと区切りがついたので、午後休暇を取って出掛けることにした。午後からの場合は、あまり遠方へは行けないのだが、ちょっと無理して、しばらくご無沙汰していた大分へ行ってみることにした。距離は一三〇キロ、車で片道三時間である。熊本大分間の国道五七号線は、阿蘇の雄大な景色などが楽しめて、三時間の距離もそれほど苦にならない。その日も、雪化粧をして活発に噴煙を上げる阿蘇が奇麗だった。平日の道路は空いていて、予定通り大分に到着し、さっそく四軒ほど回った。成果はまあまあというところだった。しかし、風が強く、夕方になるにつれ猛烈に寒くなって来た。熊本を出る時はそれほどでもなかったので、油断していたかも知れない。

次の日になって体調がおかしくなった。腰を中心に節々が痛みだし、熱が八度に上がり、全身の寒気に襲われた。その日は、市販の風邪薬を飲んで眠ったが、次の朝、顔面の左半分が赤く腫れてきて、見る間に左目が塞がってきた。ちょうど節分の日で、お多福の面をかぶった娘が、「仲間が増えた」と言ってはしゃいでいたが、次の日になっても、熱と寒気は治まったものの、顔面の腫れはますますひどくなる。極度の医者嫌いの私も、さすがに不安になって、近くの耳鼻科を訪ねた。ひと月ほど前から耳だれが出ていたので、そこから何かの黴菌が入ったかも知れないと思ったのである。医者は、私の顔を一目見るなり、「ああ、丹毒ですね」と言った。菌が歯か耳から入って、あっという間に顔面を走るという。最近は良い抗生物質があるので簡単に治るが、昔は怖い病気だったという。それから二三日薬を飲んでいると、本当に嘘のように腫れは引いて、治ってしまった。古本屋へ行ったのが直接の原因ではなかったろうが、やはり引き金になったのは事実だろうと思う。一人で行ったのが良くなかったのか知らと思ったのは、後のことである。

（五）目の毒な看板（平五年十一月）

朝十時に出発し、北九州へ向かう。北九州は、九州の古本屋巡りでは、最も収穫の多い地域である。早く起きておれば、普通道を四時間かけて行くところだったが、やむをえず高速に乗る。鳥栖インターで降りて、山越えの国道二〇〇号で、飯塚・直方を過ぎ、馬場山で都市高速に入り、黒崎で降りる。目指すは、黒崎駅の近くに出来たという古本センターである。駅の間近く、国道3号

に合流するすぐ手前で、ふと見た看板に、思わず急ブレーキをかけそうになる。「古賀屋本店」。古本屋ではない。古本屋巡りに憑かれてしまうと、かく、世界が古本屋を中心に回っているように見えてくるのである。街中を車で走っている時は、無いとわかっていても、無意識のうちに古本屋を探していることが多い。それで、何かの店の看板に「古田」とか「古川」とか、「古」の字の付くものを見つけると一瞬胸がときめくし、看板に「○○畳店」とあるのを「○○書店」と見間違えたことも一再にとどまらない。九州は、福岡県を中心に古賀という姓が多いのでやっかいである。

（六）神田の古本屋は日本一安い？（平六年六月）

国語学会春季大会が東京大学で開催。例によって、古本屋巡りに時間を費やす。先にも書いたように、筆者は年に一度か二度東京へ出て、神田などの古書店街を見て回り、資金のある限り古書を買って帰ることにしている。しかし、その内容は、高いけれども地方ではまずお目にかかれそうにない本とか、シリーズ物の欠本とか、雑誌のバックナンバーなどが中心で、本当の意味での掘り出し物に出会ったことはほとんどない。三大古書街以外の店を小まめに歩いて回れば、時にはそういう本に出くわすこともあるだろうとは思うのだが、時間の制約が大きく、交通の便のよい山の手線周辺や、地下鉄の駅周辺の店に立ち寄る程度である。経験から言えば、東京で掘り出し物を見つけるためには、店構えの小さい、国語国文関係の本を多く置いていないところをじっくりと探すことだと思うのだが、それでもめったに掘り出し物に出会わない。

ところが、今回神田三崎町の法律・経済中心の店で、太田静子『斜陽日記』（石狩書房、昭二三初版本）を見つけた。購入価二百円は、古書価一万八千円（文泉堂書店、平三）の九十分の一という記録的な安さである。

さらに幸運は重なるもので、神田の国語国文学専門の古書店にふらりと立ち寄ったところ、『島崎藤村論〈増補決定版〉』（三好行雄、筑摩書房、昭五九初版本）の箱入り・元パラ（最初からのパラフィンカバー）の美本が店頭の平台に置いてあるのを発見し、値段を見て驚いた。八百円である（定価は三千五百円、古書価一万二千円（文泉堂書店、平六））。一も二もなく購入するが、当初なぜこんなに安いのかわからず、何かいわく付きの本ではないかと勘ぐったほどである。帰ってしばらくして、本の地（野下）に近くの大学の所蔵印があることに気がついて一応納得したのだが、「廃棄本」としても破格の安さである。私は、よほど三好氏の本に縁があるようで、前回の古書店紹介でも書いたように、氏の代表的な著作を安価で次々と手に入れている。学生時代、近代文学の演習で氏の「暗夜行路」論（『作品論の試み』所収）を一生懸命に読んだご利益があったのかもしれない。この時、隣りに置いてあった『変革期の文学〈追想集付〉』（岩上順一、三一書房、昭三四初版本）も手に入れたのだが、これも九百円という安さで（古書価七千五百円（渥美書房、平七））、しかも所蔵印など一切ない本だった。この時の古本屋巡りに限っては、神田は日本一安い古書街となったのである。

（七）わが秘密の古本屋（平八年一月）

夕方、熊本県内のある古本屋へ向かう。二ケ月ぶりのことで、何か拾い物でもないかと軽い気持ちだったのだが、雑本の間にまさかとわが目を疑う本を見つける。『ロドリゲス日本大文典』（土井忠生訳、三省堂、昭五五重版本、原価八千円）である。函入りのほとんど使った形跡のない新本同様の本である。値段は付けてなかった。近くの棚では、『近代名作鑑賞〈第五版〉』（長谷川泉、至文堂、昭五二初版本、原価四千円）も見つける。やはり値段が付いていない。その他、新書本など四冊、合わせて六冊をレジに持っていく。主人は、長谷川氏の本をパラパラとめくりながら、「本がお好きなようですね。これは何の本ですか」と尋ねる。「文学関係です」と私が答える。「全部で千三百円にしておきましょう」と主人。絶句する私。「高いですか？　千円でもいいで

すよ」と主人。「いえ高くはありません」と私……。

これは夢物語ではない。しかし私にとっては正に初夢同然であった。すっかり暗くなった帰りの道を、ここで事故死はできないと目をこらしながら運転し、家にたどり着く。気分が高揚し、妻子に「次の連休にはくるくる寿司に連れていってやる」と約束する。

買った本はその日のうちに書名・著者名・出版社名・購入価格をワープロに打ち込むのだが、今回は個々の値段が分からない。やむをえず、中央の古書価格（ロ氏文典は四万八千円（八木書店、平七）、長谷川氏のものは七千円（西秋書店、平七））を参考にして、前者を千円、後者を百五十円とし、他の四冊を合わせて百五十円と打ち込む。ロ氏文典の新本同様の本が千円！　これまで私は、函なしのいわゆる海賊版（昭四四重版本の複製）を使っていたのだが（それでも五千円した）、これで晴れて本物を使えるようになるのだ。

この古本屋は、本来さまざまな古物・骨董品を売る店である。古本はそれらのついでに売っているようで、値段は度外視されている。穴場とはまさにこういう所を言うのである。初めて寄ったのは平六年五月。最初に見つけたのが、『新撰代數學』（高木貞治、博文館）である。前回、唐津の【古時計】で同じ著者の『新撰算術』（明四二重版本、初版は明三一年）を二千五百円で購入したことを書いたが、今度は明三一年の初版本で、しかも購入価はたったの五百円であった（古書価は不明）。数学の啓蒙書・歴史的名著を集め出してわずか一年足らずで、世界的数学者の処女作とそれに次ぐ著作を手元に置くことができたのである。その他、『宮澤賢治素描』（關登久也、協榮出版社、昭一八初版本、購入価五百円、古書価一万二千円（八木書店、平二）、平六購入）も相当な掘り出し物であろうし、近代文学作品では、『高架線』（横光利一、新潮社、昭五初版本、購入価三百円）と『遠乘會』（三島由紀夫、新潮社、昭二六初版本、購入価百円）も、初版美本ではそれぞれ二万円台、五万～七万円台するという（八木福次郎『古本便利帖』（平三、東京堂出版）による）ことを知らずに購入したものである（いずれも平七購入）。

この古本屋の名前は、あえて伏せて置きたいと思う（もちろん、『全国古本屋地図』等には掲載されていない）。一軒くらいは、自分一人だけの秘密の古本屋があってもよいと思うから。

十二、おわりに

以上、長々と古本屋巡りの方法と実際について述べてきた。古書の購入例が、国語学と近代文学に偏ってしまったことは心残りであるが、私の探書対象そのものが偏っていることの他に、九州の古本屋では古典文学の良書が安価ではなかなか手に入らないことも示しているようである。近代文学に触れているところでは、見当はずれの言も多いことだろう。素人のよまい言として笑って読み流していただけたことと思う。

この雑文では、他に「新書・文庫本収集の勧め」「古書に関する本の紹介」などの項目も考えていたのだが、あまりにページを取り過ぎたようである。別の機会に述べてみたいと思う。

《付》九州の古書店・訂補

前回の古書店の紹介から二年余りが経ったが、この間にも九州の古書店地図にかなりの変動があった。まず、残念なことは、大分市の藤井書店が店を閉めたことである。前回、「気品のある主人も高齢と思われ、将来が気遣われる状況である」と書いたが、不幸にも予想が的中してしまった。ここ数年で、ハレルヤ書店、藤井書店と九州を代表する店が相次いで古書界から姿を消したことになる。さらに、最近久留米の松石書店の主人が亡くなったという情報に接した。店がどうなるか気懸かりである。

一方で、北九州地域の【古本センター（古書珍竹林）】、九州各地の【満遊書店】と、チェーン店方式の新しい古本屋がオープンして、その蔵書量と価格の安さで、古書業界に旋風を起こしている。われわれ購入する側にとっては、価格の安さは歓迎すべきことなのであるが、他の従来からの古書店を有形無形に圧迫していることも考えられ、喜んでばかりはいられないという気もする。

次に、古書価の変動であるが、全般に中央の大都市の古書店価格との差が縮まってきたという印象である。前回紹介した店では、例えば北九州門司区の【佐藤書店本店】で堅い研究書の掘り出し物があったことを書いたが、その後立ち寄った印象では、絶版・品切れ本に原価近い価格を付けることはほとんどなくなったようである。このように、いわゆる「スキの無い店」の増加が、最近の傾向と言えよう。これは、目録を発行する店が増え、古書価格の相場を以前にもましてよく勉強していることも理由の一つと考えられる。古書店側からすれば当たり前のことなのかもしれないが、それによって客足が遠のくようでは、店・客ともに不幸である。地域の客あっての繁栄ということを、もう一度考えてもらいたいと思う。

以下北九州から順に、前回紹介した店のうち店舗の改装などの変化があった店、古書内容に変化のあった店、前回紹介漏れの店、新規オープンの店の紹介をして訂補としたいと思う。

〈福岡県〉

【教養堂書店】（北九州市小倉北区）

店舗がわずかに移動して（同じ道路に面している）、規模もまた小さくなった。しかし、古書内容は厳選されたようで、国語国文学の専門書は良書が多い。価格も手頃で、特に古典文学の研究書は中央よりかなり安いようだ。

【古本センター（古書珍竹林）】（北九州市・飯塚市・直方市・宗像市）

前回、【古書珍竹林】（北九州市八幡西区）としてＪＲ黒崎駅前の店を紹介したが、その後相次いで福岡県北部に支店を出し、現在、六店舗を数える。内容的には、まず厖大な量の本を扱っていること、そして質的にも珍しい良い本が多く、しかも値段が大変安いという、古本屋巡りをする者にとっては、これ以上望めない条件を備えた店である。中でも、前回紹介したＪＲ黒崎駅前の「本店」と、同じく八幡西区の都市高速黒崎ランプ近くの「引野店」が、特に掘り出し物が多く、次いで宗像市の福岡教育大学近くの国道3号線沿いにある「宗像店」が良い。

「本店」では、その後も『中世国語における文語の研究』（山口明穂、明治書院、昭五一初版本、購入価三千円、原価三千八百円、古書価二万八千円（西秋書店、平六）、平八購入）、『口語法精説』（湯沢幸吉郎、明治書院、昭五二初版本、購入価二千五百円、原価三千八百円、古書価一万五千円（八木書店、平七）、平八購入）、『言語表現の構造』（林四郎、明治書院、昭四九初版本、購入価四千円、原価五千八百円、古書価二万五千円（日本書房、平六）、平八購入）などの堅い研究書の掘り出し物がある。

また「引野店」では、『一般文法の原理』（イェルムスレウ、三省堂、昭三三初版本、購入価二百六十円、古書価八千八百円（西秋書店、平六）、平七購入）、『悪文の自己診断と治療の実際』（永野賢、至文堂、昭四四重版本、購入価千八百円、古書価九千八百円（八木書店、平七）、平七購入）などがある。また『学者評判記　上　国文学』（長野省一、有朋堂、昭四二初版本、購入価二百円、古書価不明、平七購入）は、中央でもなかなかお目にかかれない本のようである。学生時代、雑誌「解釈と鑑賞」のコラムをにやにやしながら読んでいた記憶があるが、本になっているとは知らなかった。

「宗像店」では、『廣日本文典』『廣日本文典　別記』（大槻文彦、私家版、昭四重版本、購入価合二千円、古書価合一万五千円（八木書店、昭三重版本、平六）、平七購入）、『増訂　平仲物語論』（目加田さくを、武蔵野書院、昭三三初版本、購入価千二百円、古書価一万五千円（八木書店、平七）、平七購

入）などの掘り出し物がある。

なお、これらのチェーン店は、後述の満遊書店グループと違って、新書・文庫本の価格を統一していないので、絶版・品切れのものを百～二百円程度でたくさん手にいれることができる。また、黒っぽい本に関して、開店時にたくさん入っても、その後入荷のほとんどない店が多いのに比べて、新たな本の仕入れに熱心なのも、他のユーズドブック屋と違うところである。

【宮部書店】（飯塚市）

前回紹介した店であるが、古書価について「値段が付けられていない本が多く、レジで聞く必要がある」と書いたので、その後実際に購入した本の価格の例を挙げておきたい。研究書は原則として、原価（表示価格）の六割で売っている。これだけでも相当に安いが、品切れ・絶版のものも同じ扱いなので、本によっては中央の古書価格の十分の一以下で手に入れることができる。例えば、『古代接続法の研究』（山口堯二、明治書院、昭五五初版本、購入価二千八百八十円、原価四千八百円、古書価三万五千円（八木書店、平七）、平八購入）、『源氏物語枕草子の国語学的研究』（根来司、有精堂、昭五二初版本、購入価千八百円、原価三千円、古書価一万九千円（八木書店、平七）、平八購入）など。店の人の話では特別の仕入れルートがあるらしい。前にも書いたように、古典文学が充実しており、特に中古文学の堅い研究書を安く手にいれたいという人にお勧めしたい店である。

【信栄堂書店】（飯塚市）

前回は、飯塚市には宮部書店のみと書いたが、この店を落としていた。市の中心部、本町通りの東側裏にある。飯塚郵便局の近くである。店舗はそれほど広くはないが、奥行きがあるので、ゆったりと探書できる。人文・社会関係古書がかなり豊富に揃っている。美術書などの大型図書が多いのが特徴である。国語国文学はやはり近代文学中心である。値段は標準的と思われる。

【入江書店】（福岡市）

平七年に店舗を改装し、一般書・文庫などを減らして専門色がやや強まった感じである。近代文学が充実し、値段も高くはないと思われる。

【筑前書店】（筑紫野市）

旧称「アメ横古書」。西鉄二日市駅前にあった頃は、店舗も狭く、国語国文関係の古書も少なかったので、前回は紹介しなかったが、近くのダイエー前の電器屋の二階に移転、改称して、相当な店構えと古書量を誇るようになった。二階のフロア全体を占める古書は多岐にわたり、黒っぽい本も多い。値段は、全集物・郷土誌などを別とすれば、比較的安いという印象である。

【大牟田古書センター】（大牟田市）

前回紹介した吉田書店の通りをさらに三百メートルほど南関方面へ行ったところのスーパーの中にある。久留米古書センターに似た内容の店で、黒っぽい本も相当に置いてあるが、今さらという本が大部分。他に、全集物の端本も多い。狙い目は、近代文学の比較的新しい品切れ本で、『雨の玉川心中』（山崎富栄、真善美研究所、昭五二初版本、購入価五百四十円、古書価四千八百円（文泉堂書店、平七）、平七購入）など。

【満遊書店】（各地）

前回、熊本市の古書店の紹介のところでちょっと触れたが、九州各地に次々とこの店が出来ている。熊本市以外で筆者がこれまでに寄ったのは、北九州市が二軒（小倉北区の若松書房の西六百メートル程のところ、八幡西区のＪＲ黒崎駅の東百メートル程のところ）、福岡市が二軒（福岡空港そば、西鉄高宮駅と大橋駅の中間あたりの県道福岡筑紫野線沿い）、長崎市が一軒（平和公園近くの大橋町バス停そば）、鹿児島市が一軒（市電加治屋町駅の近く）である。いずれも、広い店内に一般書・新書・文庫・コミックが多量に置いてある。専門書はあまり期待できないが、見つかった場合には相当安く手に入れることができる。また、たとえば岩波新書・同文庫は二百五十円に統一されているので、品切れ本があれば儲け物ということになる。しかし、店によっては、書架と書

架の間が極端に狭いので、探書の際には非常に目が疲れる。一日であちこち古本屋巡りをする時には、この店は後回しにして、時間と体力に余裕がある場合に寄った方が無難であろう。

これらの中では、福岡空港そばに平七年十一月にオープンした店が最も規模が大きく、古書も一番充実している。『物語文學史論』（新訂版、三谷栄一、有精堂、昭四〇初版本）は、一度佐賀玉屋古書市（平七年十月）において千円で購入し、知人に譲ったことのある本であるが、ここでも二千五百円という手頃な値段で手に入れることができた（古書価一万二千円（八木書店、平七））。その他、『朝日小事典　夏目漱石』（江藤淳編、朝日新聞社、昭五二初版本、購入価三百九十円、古書価九千五百円（文泉堂書店、平八）、『藤村の思い出』（島崎静子、中央公論社、昭二五初版本、購入価六百円、古書価九千八百円（文泉堂書店、平七））、『志賀直哉研究』（須藤松雄、明治書院、昭五二初版本、購入価千七百円、原価二千四百円、古書価八千八百円（八木書店、平七））など、新書版では『森鷗外　妻への手紙』（小堀杏奴編、岩波新書、昭一三初版本、購入価二百五十円、古書価三千八百円（八木書店、平二））など、掘り出し物は少なくない。

〈長崎県〉

【太郎舎書房】（長崎市）

前回紹介した【ふるほん太郎舎】の二階にある。同店の古書部というべき店。人文・社会・自然各分野の専門書を置いている。国語国文関係の絶版・品切れ書もかなり豊富に揃っていて、筆者の欲しい本も少なくないのだが、値段は神田並みで、容易に手が出ない。古書の内容は「太郎舎古書目録」で見ることができる。

【夢屋】（長崎市）

【ふるほん太郎舎】から電車通りを北へ六百メートル程、住吉電停の右側、住吉神社へのアーケードの中にある。開店後二年あまりの新しい店である。『全国古本屋地図』未掲載。美術・音楽・映画関係の本が多い。白っぽい人文・社会関係の本も少なくないが、値段は原価の八割程度のものが多く、安いという印象はない。

〈熊本県〉

【舒文堂河島書店】（熊本市）

しばらく仮店舗で営業していたが、平七年四月に改装オープンした。店内はかなり広くなり、奥行きも深くなって、古書量も相当に増えた。古書内容は以前と変わらないが、近代文学中心に良書が多い。値段は、私などの目からすればかなり高目であるが、中央よりはまだ安い。

【やっしろ書店】（熊本市）

河島書店などがある上通りを北へ突っ切り、大通りへ出て、さらに北へ続く道へ入ったところの右側にある。『全国古本屋地図』未掲載。小鳥と子猫が迎えてくれる。小さな構えで、雑然としているが、珍しい本が多い。特に、河島書店のような大きな店に置いていない郷土史・民俗関係の小冊子などに面白いものが多い。国語国文関係の本は近代文学が中心。『山崎富栄の生涯』（長篠康一郎、大光社、昭四二初版本、購入価二千円、古書価六千五百円（文泉堂書店、平七））はやや良い買い物。

【ほると書房】（玉名市）

前回簡単に紹介した店である。県立玉名高校のすぐ前にある。郷土誌関係と近代文学が少しずつ充実してきている。絶版文庫にも面白いものが多い。値段はそれほど安くは感じられないが、『源氏物語新見』（門前眞一、同教授還暦記念會、昭四〇初版本、購入価千五百円、古書価一万八千円（八木書店、平七）、平七購入）は例外。

【満遊館】（熊本県菊池郡菊陽町）

熊本市の東部、阿蘇へ通じる国道五十七号線の菊陽バイパス沿いに、市内に二軒ある満遊書店の姉妹店として、平七年十一月に出来た真新しい古本屋である。二十台以上置ける駐車場を備え、店舗も恐らく福岡空港前店や鹿児島店に次ぐ規模であろう。古書内容は、他の店と変わらず、一般書・文庫・コミック中心で、堅い古書は多くないが、黒っぽい本には珍しいものもある。『箋注倭名類聚抄』（全十冊揃、狩谷掖齋、大十年重版本、印刷局、購入価四千円、古書価三万五千円（明十六初版本、八木書店、平七））のほか、『國木田獨歩―比較文學的研究―』（益田道三、堀書店、昭二三初版本、購入価千五百円、古書価二万円（八木書店、平五））、『作品論　夏目漱石』（内田道雄他編、双文社、昭五一初版本、購入価千五百円、原価三千九百円、古書価一万二千円（八木書店、平六））、『昭和文学史の構想と分析』（大久保典夫、至文堂、昭四七重版本、購入価千八十円、原価二千七百円、古書価一万五千円（八木書店、平七））、『童話十講』（芦谷重常、大一三初版本、大阪毎日新聞社、購入価八百円、古書価六千八百円（西秋書店、平六））など掘り出し物も多い。

《宮崎県》

【橋本書店】（宮崎市）

平七年初頭に店舗を改装、駐車場も付いて、面目を新たにした。古書内容も、以前にスペースを割いていた一般書・文庫・新書を減らし、堅い専門書を増やして、一段と充実したものになった。中でも近代文学の研究書・評論に良書が多く、国語学・古典文学の堅い本も少なくない。価格も、以前はあまり安いという印象はなかったのであるが、他の九州を代表する店が全国的な古書価高騰の流れに棹さす傾向を強めたのに対して、あくまで地方の古書店らしい節度のある価格に抑えているのは、大変好感が持てる。特に、中央ではすぐに万単位に跳ね上がる絶版・品切れの研究書の値段を、原価に近く抑えてくれているのが有り難い。例えば、『蜻蛉日記と更級日記』（中田秀夫、明治書院、昭五三初版本、購入価二千八百円、原価三千二百円、古書価二万八千円（日本書房、平七））は中央の古書価に比べてあまりに安いので、つい買ってしまったものである。その他、近代文学では、『誤解と偏見―樋口一葉の文学―』（塚田満江、中央公論事業出版、昭四二初版本、購入価千三百円、古書価一万二千円（八木書店、平七）、『漱石・龍之介の精神異常』（塩崎淑男、白揚社、昭三二初版本、購入価千円、古書価九千八百円（文泉堂書店、平五）といった稀少性の比較的高い本もご覧の値段である（いずれも平八購入）。この店の老主人は、無愛想で取っ付きにくいので、親しく話を交わしたことは一度もないのであるが、過日寄った時に、一般書や文庫本などをひっくりかえしてただ眺めるだけの、いわゆるひやかし客に対して、「出て行け」と一喝する場面に出会った。この反骨と気概を貫き通して、できるだけ長く健在でいて貰いたいと願うばかりである。ともかく、南九州は古書店が少なく、古本屋巡りの楽しみが薄いのは以前とあまり変わらないのだが、この店だけのために遠方から訪れても、失望させられることはないのではないかと思う。

（平八年二月稿）

―熊本大学文学部助教授―